

第1章 小山町の概要

第1節 自然的・地理的環境

1 町の位置と面積

本町は静岡県の北東端に位置し、東を神奈川県、北西を山梨県に接している県境の町です。北西端は富士山頂に達しており、東西に長い地勢です。本町の成り立ちは、現在の小山町の前身となる旧小山町（現在の成美地区（旧六合村）及び明倫地区（旧菅沼村））、旧足柄村、旧北郷村、旧須走村に由来し、現在、これらを基本とした5地区（成美地区、明倫地区、足柄地区、北郷地区、須走地区）にて小学校区が設定され、自治会運営がなされています。

文化財の保存・活用にあたっては、学校教育やまちづくりとの連携が重要であることから、本計画ではこれら5地区を基本とした地区区分により計画を推進します。

表1-1 町の位置・面積

位置	東経138度59分、北緯35度21分
広ぼう	東西26.04km、南北13.33km
面積	135.74km ² （成美地区及び明倫地区合計28.02km ² 、足柄地区20.14km ² 、北郷地区45.34km ² 、須走地区42.24km ² ）

出典：小山町の統計 令和2年度版

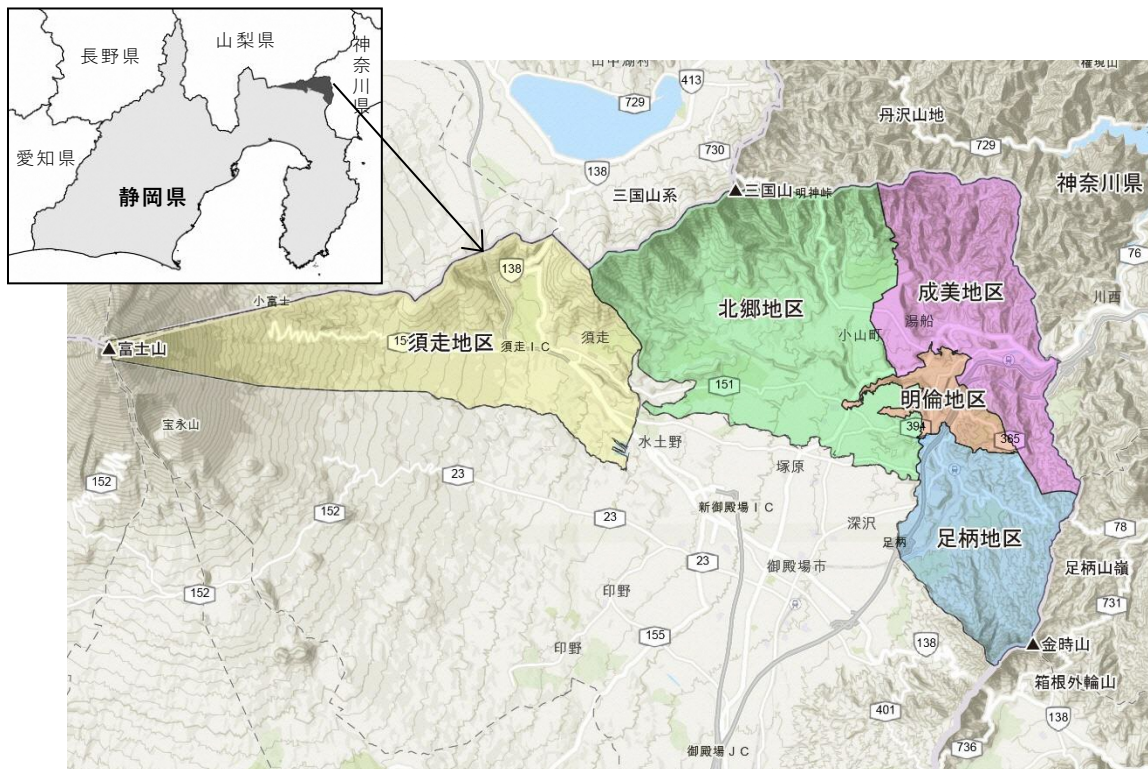


図1-1 小山町の位置と地区区分

町内には透水層と不透水層が混在していることから、湧水箇所が数多く存在しています。例えば、足柄城跡の本城には、雨乞いの池として足柄地区の人々から親しまれている「玉手ヶ池」があり、これは不透水層が本城の上部に椀状に覆われていることで、水が溜まる池となっています。この玉手ヶ池は、足柄城の井戸としての記録が残っています。



図1-3 玉手ヶ池（足柄城跡）

そして、宝永4年（1707）の富士山宝永噴火によるスコリアが町内全域にかけて厚く覆われていることも本町の地質の特徴です。最大の降灰量となった須走地区には、約3m以上の火山灰に覆われました。その他北郷地区では約1～2m、成美地区、明倫地区、足柄地区でもおよそ0.5～1.5mの火山灰に覆われました。



図1-4 宝永噴火のスコリア

これは、西からの風により、宝永山からの火山灰が東に流れたことで、本町域は、宝永噴火最大の被災地となりました。この火山灰は現在も町内各地に残っています。

火山砕屑物（火砕物）：噴火により火口から噴出された溶岩流を除く噴出物を総称して火山砕屑物といいます。粒径により、火山岩塊、火山礫、火山灰に分類され、その中で、多孔質で淡色のものを軽石、暗色のものをスコリアといいます。
 （出典：用語の説明 | 国土地理院）

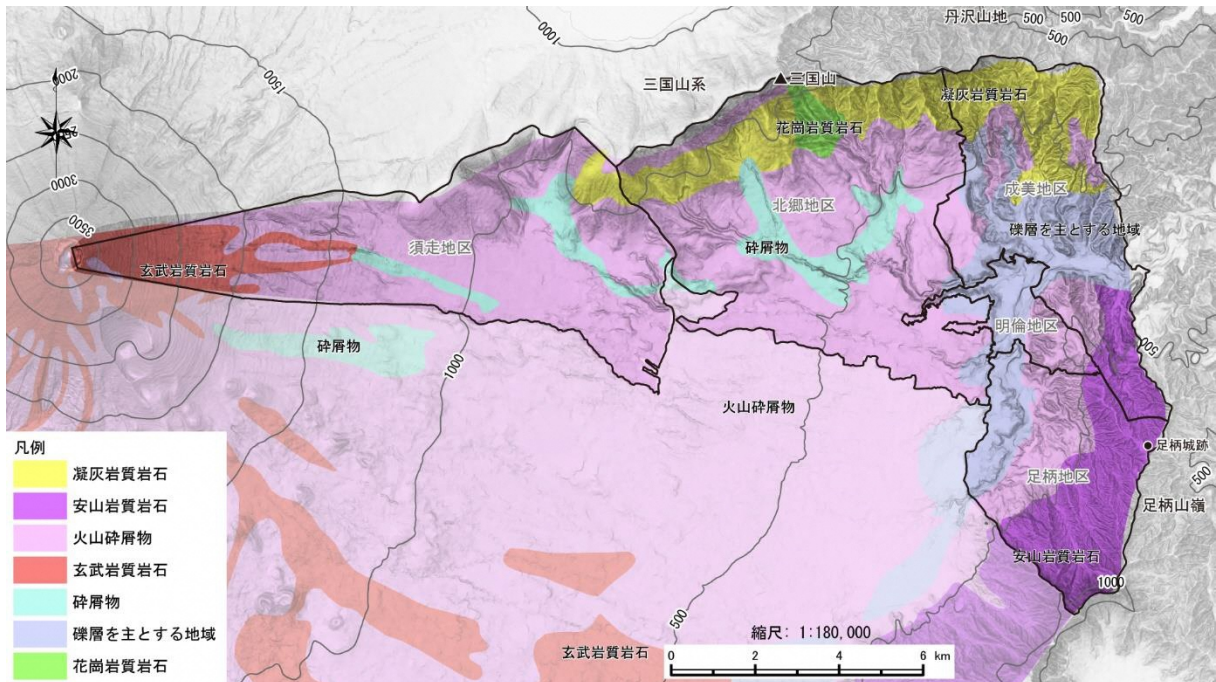


図1-5 小山町の地質（出典：国土地理院（20万分の1土地分類基本調査を加工））

(3) 水系

河川は源を富士・箱根山麓に発する鮎沢川が、馬伏川、須川、野沢川、地蔵堂川と合流して東に流れ、酒匂川となって相模湾にそそいでいます。なお、この鮎沢川は、本町に隣接する御殿場市中畑が起点となっています。

鮎沢川は、これまで何度もなく大洪水をおこしながら川底や壁面を削っていき、明倫小学校の裏では、高い崖として鮎沢川の水が長い年月をかけて削ってできた河岸段丘を確認することが出来ます。

鮎沢川は町内の平野部分を流下していることから、明治22年(1889)には川沿いに東海道線が開通しました。さらに明治29年(1896)には、交通の便が良いことと水が豊富であることから、水力を利用した紡績工場の適地として見出され、富士紡績株式会社(以下、「富士紡」という)が成美地区及び明倫地区で操業を開始しました。



図1-6 鮎沢川

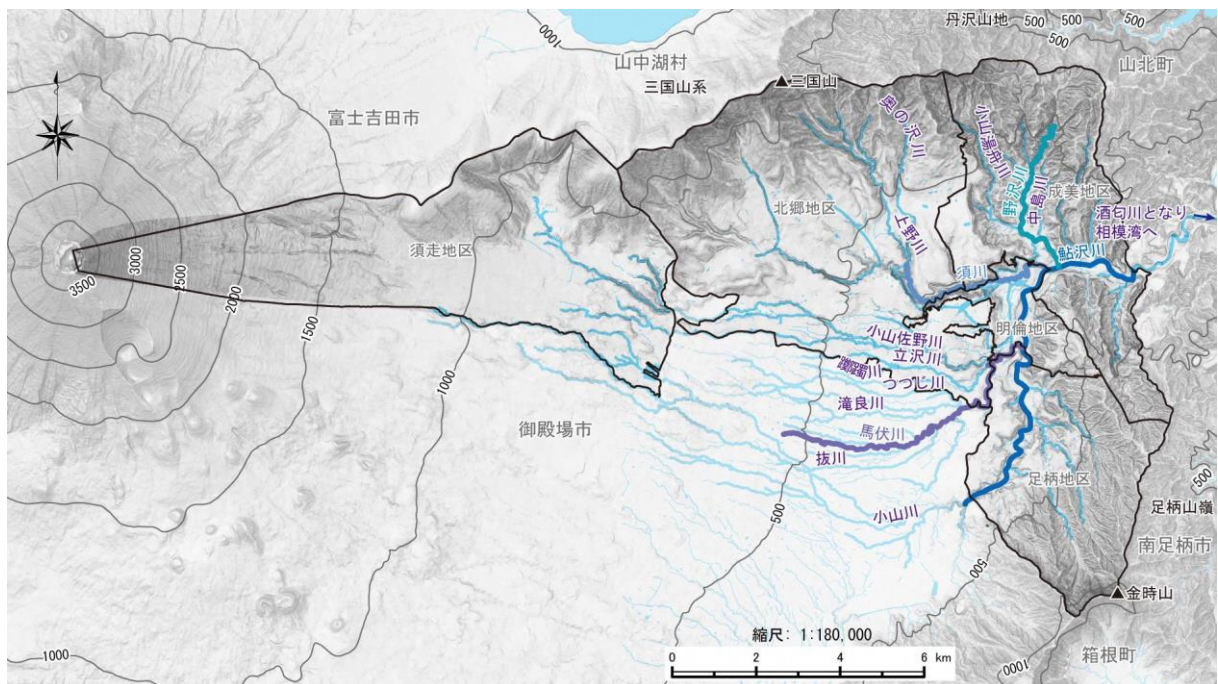


図1-7 小山町の水系 (出典：国土地理院(20万分の1土地分類基本調査を加工))

3 気 候

本町は標高が高いため過去10年間の平均気温は、中心市街地である小山消防署周辺で約14℃と、比較的温暖な静岡県内でも低く、8月の月平均気温と1月の月平均気温との年較差は22℃程度となっています。（富士山頂の気温を除く。）

また、過去10年間の小山消防署（菅沼地区）での平均年間降雨量は、富士山による影響もあり、2,550mm程となっています。霧の発生が多い地域でもあることから、年平均日照時間数は1,800時間以下となっています。山間部では最深積雪が10cm以上となります。

近年、全国各地で豪雨などの自然災害が多発し、本町においても平成22年（2010）の台風9号、令和元年（2019）の台風19号に伴う豪雨により甚大な被害が発生したことから、今後も自然災害への備えを万全にしていける必要があります。



図1-8 平成22年台風9号による被害（野沢川河口）

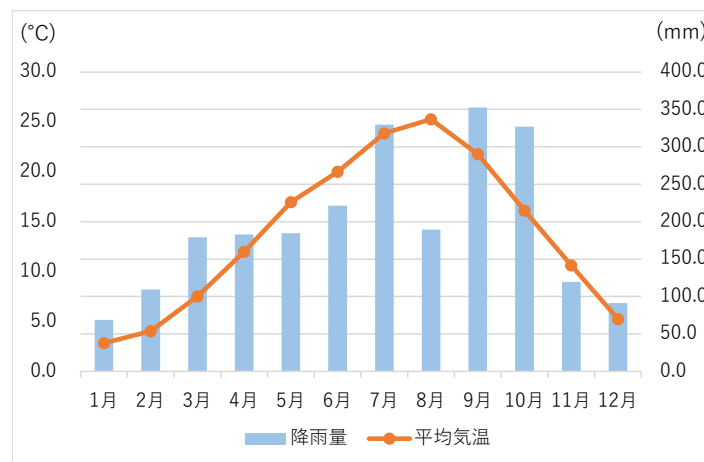


図1-9 平均気温と月降雨量（平成23年～令和2年平均）

出典：小山町の統計（平成23年度版～令和2年度版）

4 生態系

（1）植物

本町の植生は、富士山、三国山地、箱根・足柄山系（金時山）の大きく3つの区域に分けられます。また、その特徴として、富士山山頂から市街地までに3,500mもの標高差があることから多様な植生がみられること、富士山の噴火に由来する植生破壊により、遷移の途中相の群落が各所にみられることが挙げられます。

富士山の500m以下の丘陵地帯には、カシ、シイなどの林があり、町の花であるフジザクラ（マメザクラ）も分布しています。また、スギやヒノキの植林も広がっています。500mから1,000mまでの山地帯には広大なススキ草原があります。1,500mから2,500mの亜高山帯には、カラマツ、ダケカンバ、モミヤツガなど針葉樹の

林が多くあります。根を深く広く張って安定させ、少ない水分を吸収して生きるフジアザミ、オンタデ、メイゲツソウ、ムラサキモメンツルなどは、荒地でも生育できる植物であり、麓から分布域を広げたものが始まりと考えられます。

これら先駆植物が生えると地中に栄養物がたまり、砂も根の力で砕かれ他の植物も生えやすい条件となります。この結果、日当たりを好むカラマツやダケカンバなどの木が生え出し、先駆植物は追われ更に上に上がります。また、日当たりを好む木もその下から生え出し高木となるシラビソ、コマツガなどに日当たりを奪われ更に上に上がります。



図1-10 オンタデ

このようにして、富士山の植物は徐々に生息域を広げていきました。

明神峠から三国山にかけての三国山稜は、尾根沿いや南斜面にブナ、ミズナラの森が見られ、日本を代表する自然林です。ブナ林にはカエデ類が多く出現することが特徴で、オオモミジ、オオイタヤメイゲツ、イタヤカエデなどが見られます。近年ではブナの自然林は減少し、大切な自然の財産として残していくことが重要です。

箱根・足柄山系においては、箱根外輪山の最高峰であり、箱根山の寄生火山である金時山には、ブナを主とした夏緑林がよく発達しています。ブナをはじめ、ヤマボウシ、ミズナラ、ヒメシャラ、オオイタヤメイゲツなどが見られ、林床にはウラハグサが多く生育し、ヒメシャガも見られます。

また、町内全域にスギとヒノキの植林が広がっています。

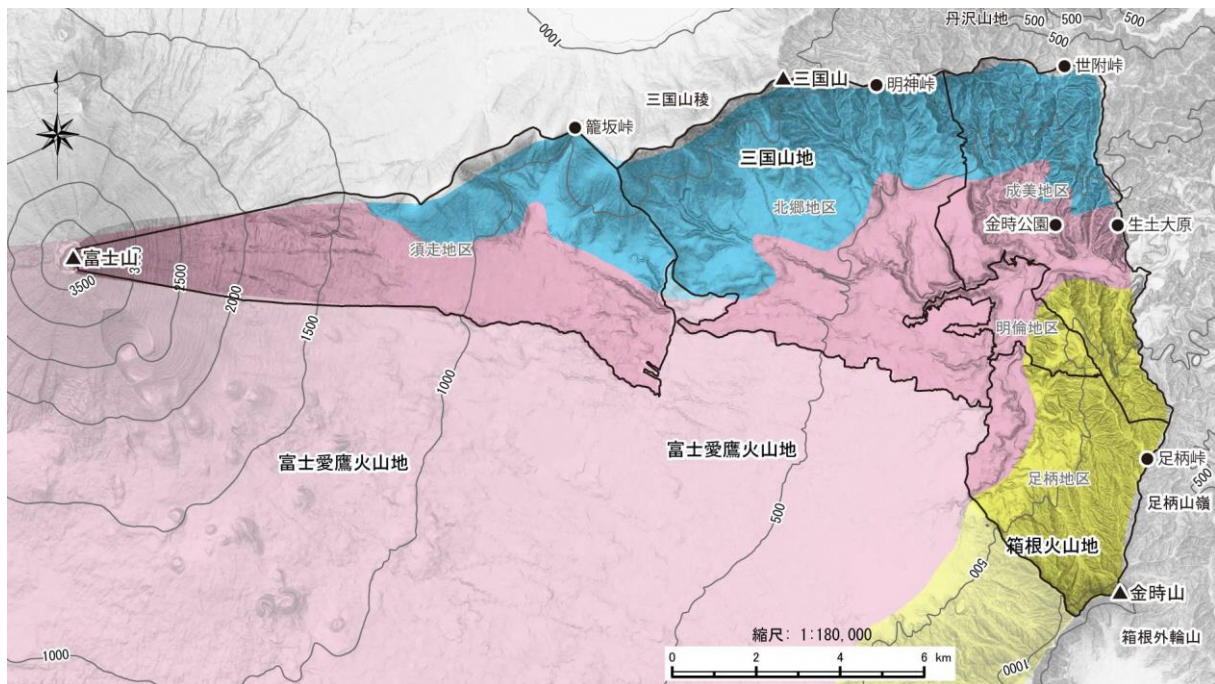


図1-11 小山町の地形区分と標高

(出典：国土地理院 (20万分の1 土地分類基本調査を加工))

(2) 動物

町内には、町を特徴付ける両生類、魚類が無いことから、哺乳類と鳥類、昆虫類について記述します。

平成元年（1989）～平成2年（1990）にかけて実施された^{おやまちょうしへんさん}小山町史編纂事業の調査によると、哺乳類は、イノシシやホンドギツネ、ホンドイタチ、ウサギなどが山梨県および神奈川県との県境の山間部等で広く確認され、また、^{かごさかとうげ}籠坂峠周辺でニホンジカやニホンカモシカ、ホンドタヌキ、ホンドテンが確認されています。一方、聞き取りではニホンザル、ニホンアナグマ、オコジョが存在するといわれていますが、調査では生息が確認されませんでした。

しかし、^{おやまちょう}小山町猟友会からは、存在するという情報が寄せられています。

表1-2 平成元年～2年の哺乳類の確認調査結果

調査日	地点	ツキノワグマ ニホン	イノシシ	ニホンジカ	ニホンカモシカ	ニホンザル	ニホンアナグマ	ホンドギツネ	ホンドタヌキ	ホンドイタチ	ホンドテン	ハクビシン	オコジョ	ウサギ	その他鳥獣
1989. 11. 11	籠坂峠		○	○				○	○	○				○	ヤマドリ、キジ（鮎沢川）
1989. 11. 12	明神峠 世附峠		○												
1990. 1. 17	籠坂峠 明神峠		○	○	○			○	○	○	○	○		○	
1990. 1. 18	明神峠 世附峠		○					○		○				○	ヤマドリ（世附峠）
1990. 5. 29	世附峠		○					○							
1990. 6. 20	金時公園														
1990. 7. 16	生土大原		○												
確認状況		x	○	○	○	x	x	○	○	○	○	○	x	○	

○：生息の痕跡が確認されたもの

x：聞き取り調査では生息するとされるが、現地で確認できなかったもの

鳥類については、^{ふじさん すばしりぐちとさんどう}富士山の須走口登山道において、亜高山の鳥であるミソサザイやルリビタキ、キクイタダキなどの声を聞くことができます。^{ひがしふじさんしゅうじょう}東富士演習場ではノビタキ、コヨシキリ、セッカヌグイスなどの草原の鳥がみられます。昭和9年（1934）には、「日本野鳥の会」の探鳥会が^{すばしり}須走で開催され、^{なかにし ことう}中西悟堂、^{きたはらはくしゅう}北原白秋、^{きんたいちはるひこ}金田一春彦などが訪れています。

昆虫については、ホタルが町内全域で飛び交っています。町内全ての地区で、5月下旬から6月中旬にかけてゲンジボタルが、6月下旬から8月上旬にかけてヘイケボタルが飛翔します。^{めいりん}明倫地区では、陸棲のクロマドボタルが確認されています。また、^{ふじさん すばしりぐちとさんどう}富士山須走口登山道の旧道（標高約1,500m）では、陸棲のヒメボタルが飛翔しています。



図1-12 ニホンジカ
(写真提供：県自然保護課)



図1-13 ニホンジカ (須走口五合目)
(写真提供：県自然保護課)



図1-14 ニホンカモシカ



図1-15 ツキノワグマ



図1-16 ルリビタキ
(写真提供：静岡県立森林公園)



図1-17 ゲンジボタル
(写真提供：静岡県立森林公園)

第2節 社会的環境

1 町域の変遷

町村合併によって誕生した新たな町村を基盤に明治22年(1899)4月、町村制が施行されました。成美地区においても、藤曲村ほか5か村が合併して戸数259戸、人口1,624人の「六合村」となりました。明倫地区では、「菅沼村」が戸数135戸、人口802人の独立村として発足しました。足柄地区では、足柄村ほか3か村、新柴村ほか2か村が合併して戸数207戸、人口1,128人の「足柄村」となりました。北郷地区では、用沢村ほか12か村が合併して、戸数536戸、人口3,381人の「北郷村」となりました。須走地区では、「須走村」が戸数99戸(人口不明)の独立村として発足しました。

大正元年(1912)8月1日、六合村、菅沼村が合併して町制が施行され、「小山町」が誕生しました。その後、町村合併促進法施行により、昭和30年(1955)4月1日には足柄村が、昭和31年(1956)8月1日には北郷村が、昭和31年(1956)9月30日には須走村がそれぞれ小山町に合併し、新小山町が誕生、現在の町域に拡大しました。

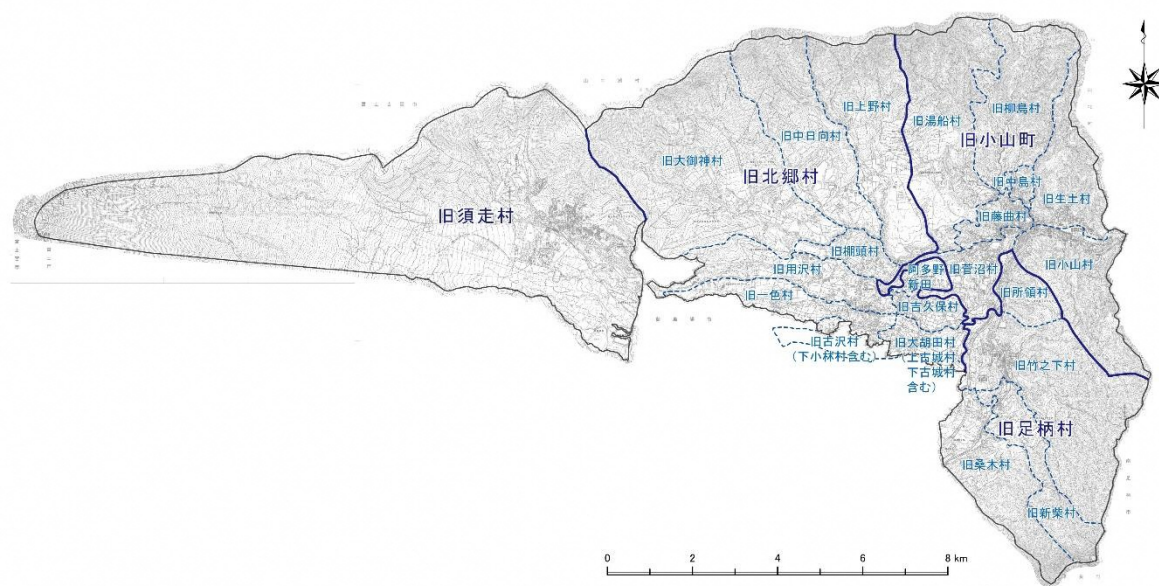


図1-18 小山町の旧村の位置

明治22年(1889)
町村制による合併

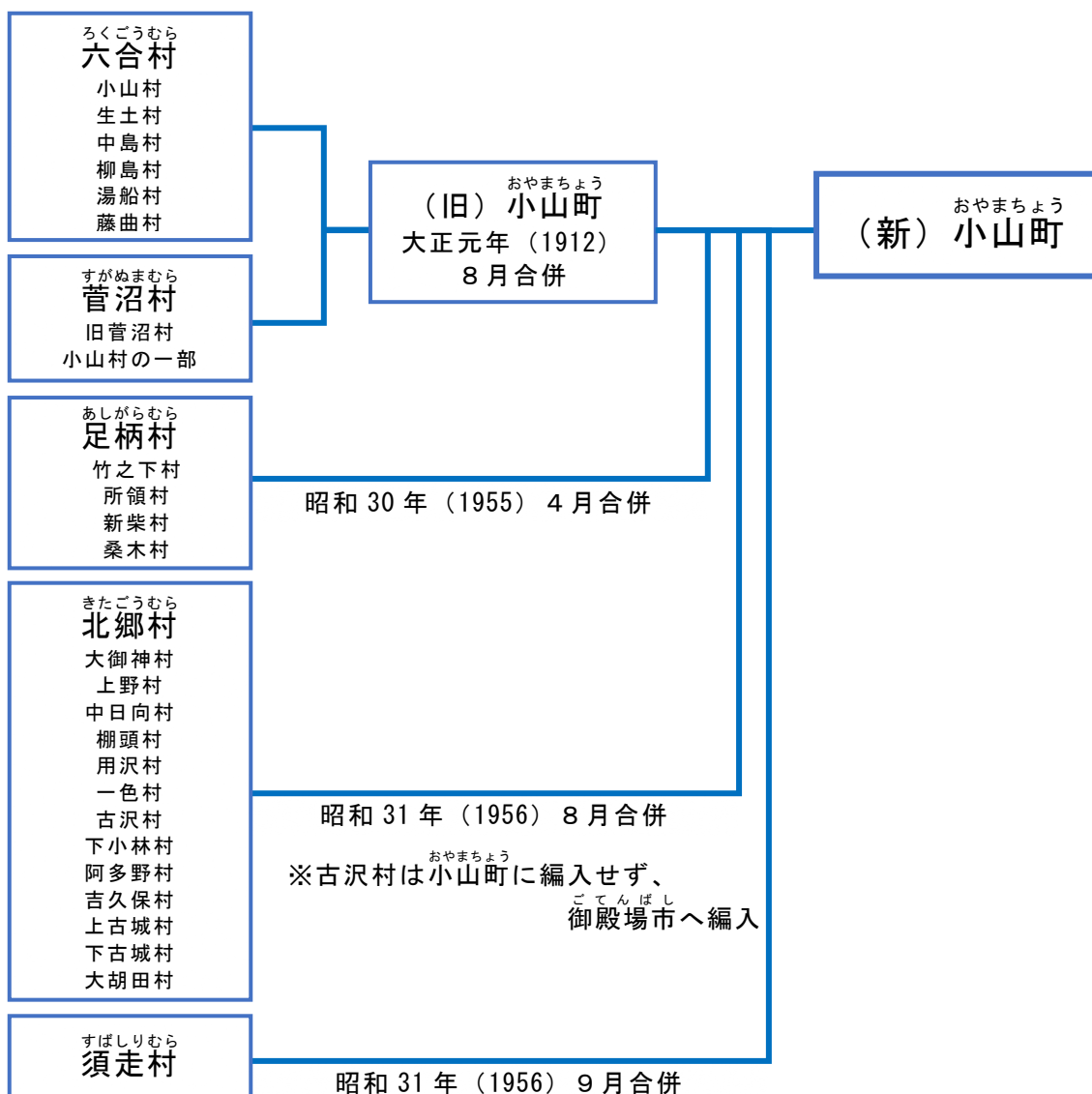


図1-19 ^{おやまちょう} 小山町の町村合併の経緯

2 人口動態

昭和60年(1985)以降の国勢調査によると、本町の総人口は平成2年(1990)をピークに減少傾向にあります。令和4年(2022)8月1日現在の人口は、17,667人(住民基本台帳)となっています。

15歳未満人口(年少人口)は昭和60年(1985)以降、15~64歳人口(生産年齢人口)は平成2年(1990)以降減少しています。一方で、65歳以上人口(高齢者人口)は昭和60年(1985)以降増加を続け、高齢化率は10.3%から26.3%と約2.6倍になりました。

令和3年度(2021)の人口増減では、出生や死亡による自然増減では、91人の出生に対し死亡が256人で、165人の減少となっています。転入転出の社会増減では、転入等が165人、転出等が1,099人であり、134人の減少となっています。これらの減少は、出生率の低下に伴う要因と、^{すばしり}須走地区にある^{りくじょうじえいたいふしがっこう}陸上自衛隊富士学校の人事異動に伴うものです。

今後、人口減少は加速度的に進むものと予想され、国立社会保障・人口問題研究所が平成30年(2018)に公表した将来推計人口によると、令和22年(2040)における本町の人口は約13,217人まで減少するとされています。

なお、第5次^{おやまちょう}小山町総合計画では、これまでの人口動向を踏まえ、これからの施策効果を含む社会動態を加味し、将来人口推計を行った結果、同計画後期基本計画の計画期間の最終年である令和12年度(2030)の将来人口を16,500人に設定しています。

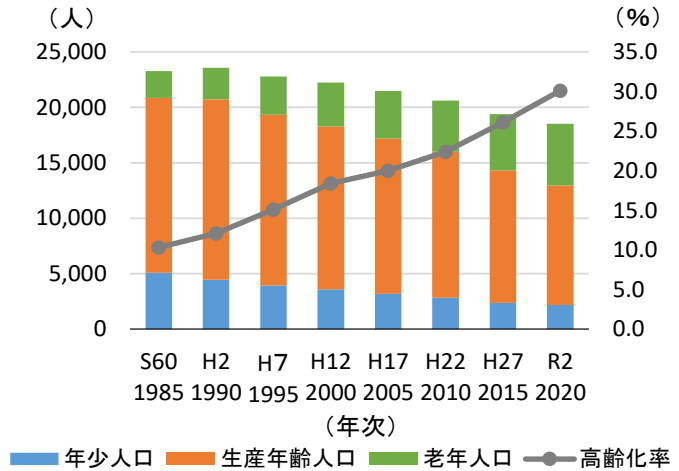


図1-20 年齢3区分別人口の推移
(出典：国勢調査)

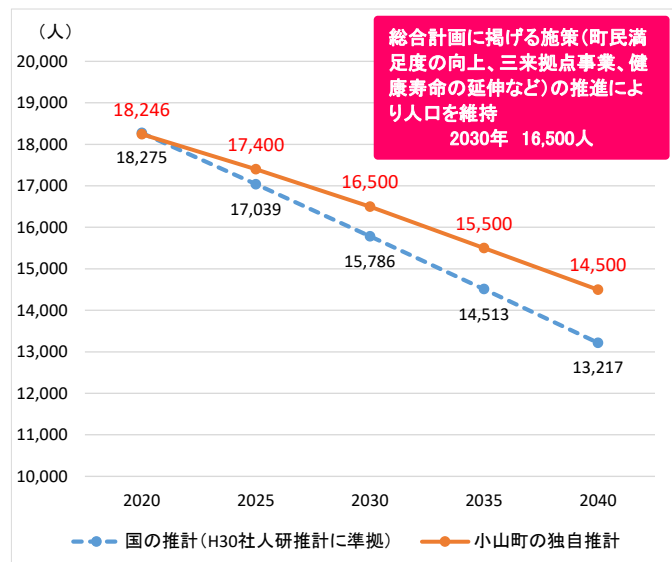


図1-21 将来人口の推計結果
(出典：総合計画)

3 産 業

(1) 就業構造

本町の実業人口は、平成27年（2015）は10,629人で、平成2年（1990）の13,454人から2,825人減少しています。産業別にみると、第三次産業が最も多く全体の約70%を占めていますが、平成17年（2005）以降減少に転じています。第二次産業は、平成2年（1990）以降減少傾向にあり、ピーク時のおよそ半分となっています。また、第一次産業は、昭和60年（1985）と比較すると、緩やかな減少傾向にあると言えます。

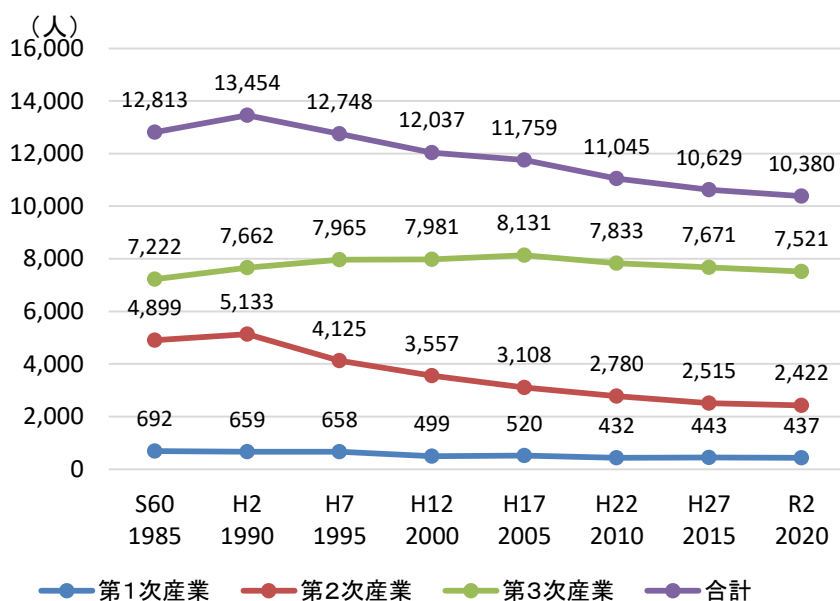


図1-22 産業別就業人口の推移 (出典：国勢調査)

(2) 産業の誘致について

静岡県は、防災・減災と地域成長を両立させた魅力ある地域づくりを実現するため、平成26年度（2014）に「内陸フロンティア推進区域」制度を創設しました。

（平成30年度（2018）に「ふじのくに」のフロンティアを拓く取組」に名称変更）
県が指定するフロンティア推進区域は、令和3年（2021）2月時点で、静岡県下全35市町で取組み、74区域が指定されています。

本町には、8つの推進区域があり、工業団地や住宅地団地、太陽光や木質バイオマス発電によるエネルギーの創出のほか、観光交流人口拡大のための施設誘致や、さらに、次世代施設園芸の一大拠点となる農地の創出も実施します。産業拠点を整備することで雇用を創出し、居住環境の整備により移住・定住を促し、子育てニーズに応えるなど、様々な世代の町民が元気に安心して暮らせる町を目指しています。

ふじのくにのフロンティア

ふじのくにのフロンティアとは、^{しんとうめいこうそくどうろ}新東名高速道路等を最大限活用し、内陸部に災害に強く魅力ある先進地域を築くことや、都市部と内陸部の両地域間の連携と相互補完による均衡ある発展を促し、南海トラフ巨大地震等の有事に備えた地域づくりモデル形成を目標とし、防災・減災機能の充実・強化と有事に強い産業基盤の構築、生活環境の確保及び広域ネットワークの構築を図るものです。

4 土地利用

本町の総面積135.74km²のうち、土地利用の内訳(地目別面積)は、水田5.4km²(4.0%)、畑2.34km²(1.7%)、宅地6.79km²(5.0%)、山林47.87km²(35.3%)、原野15.63km²(11.5%)、雑種地15.82km²(11.7%)、^{りくじょうじえいたいふじがっこう ひがし}陸上自衛隊富士学校や^{ふじえんしゅうじょう}富士演習場なども含めた公共用地41.89km²(30.9%)となっています。(出典：^{おやまちょう}小山町の統計(令和2年度版))

山地部は主に山林として利用されており、スギ・ヒノキなどの植林地のほか、^{すばしり}須走^{ぐちとざんどう}口登山道には、モミやツガなどの自生林も広がっています。

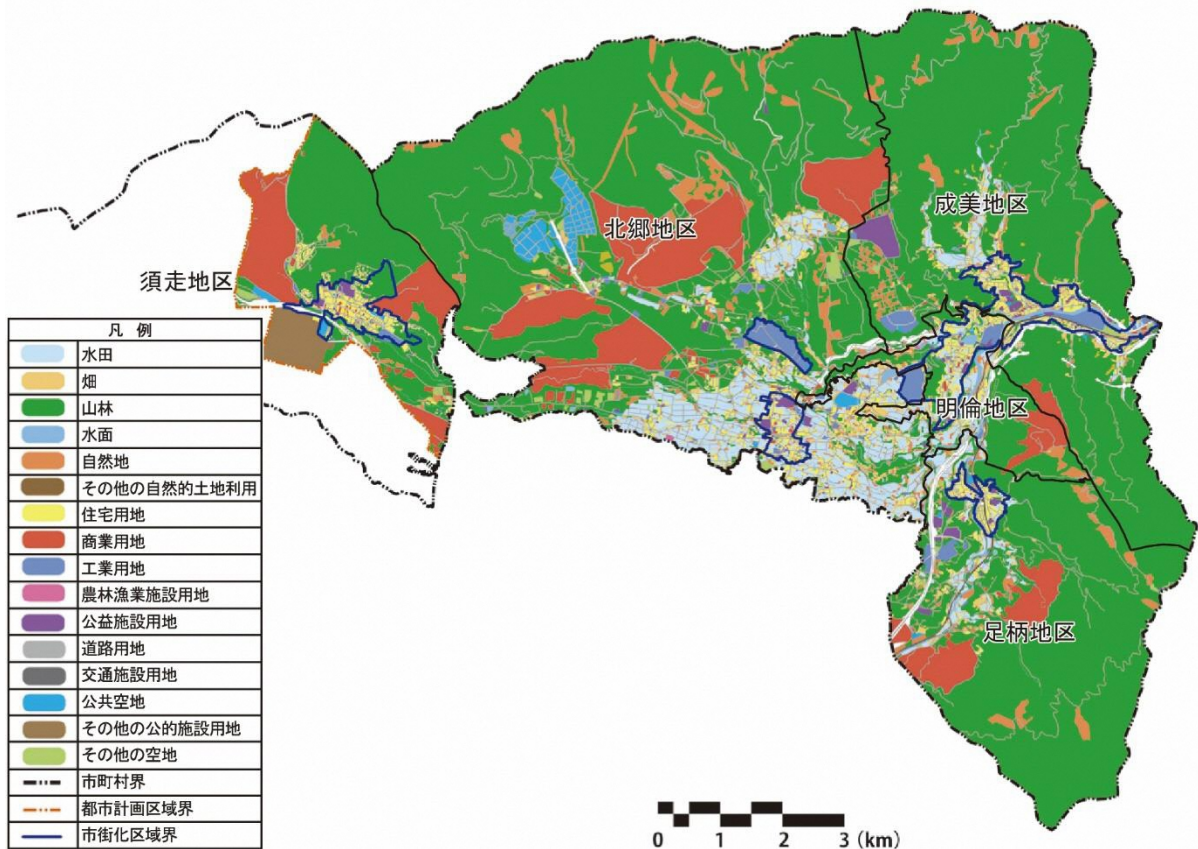


図1-23 土地利用現況図 (出典：平成23年度都市計画基礎調査)

5 交通機関

本町は、古くは北西部の籠坂（加古坂）峠で甲斐へ向かう道と、南東部の竹之下から足柄峠を越えて相模へ至る古東海道（足柄路）の通る交通の要衝地として栄えました。

現在町内には、2本の国道と9本の県道があります。昭和44年（1969）には東名高速道路が、昭和47年（1972）には裾野バイパス（現国道246号）、平成元年（1989）には東富士五湖道路が開通しました。平成31年（2019）3月には、東名高速道路、足柄サービスエリア（上下線）に接続する足柄スマートインターチェンジが開通しています。国道246号は、成美地区から明倫地区、北郷地区を通り、沼津市に至ります。国道138号は、須走地区を南北に縦断しながら、山梨県山中湖村に至ります。このように南北を延伸する国道と東西に延伸する県道と町道により、車両交通の利便性が良い町域と言えます。JR足柄駅が起点となる県道足柄停車場富士公園線は足柄地区から北郷地区、須走地区を通過し、富士山須走口登山道として富士山頂に至ります。

また、令和5年度（2023）には新東名高速道路（秦野IC～御殿場IC間）の開通、（仮称）小山パーキングエリアと（仮称）小山スマートインターチェンジの開設が予定されています。これにより、高速道路及びその周辺道路の渋滞解消や救急医療活動での活用のほか、町内観光地や地域産業の集積する地区などへのアクセス向上による地域の活性化等の効果が期待されています。

本町における公共交通は、鉄道、高速バス、路線バス、コミュニティバスが主たるものとなっています。鉄道は、JR御殿場線が町東部を南北に縦断し「駿河小山駅」「足柄駅」の2駅が町内に存在します。高速バスは、東名高速道路沿いにある「東名小山」「東名足柄」と、「富士学校前」の計3箇所のバス停があります。路線バスは、富士急モビリティ（株）によって御殿場市と町内を結ぶ路線を中心に形成されています。広域の移動手段としては、鉄道、高速バス、路線バスが担っており、町内の移動についてはコミュニティバスの定時運行バス、デマンドバスが担っています。



図1-24 JR足柄駅（設計：隈研吾建築都市設計事務所）

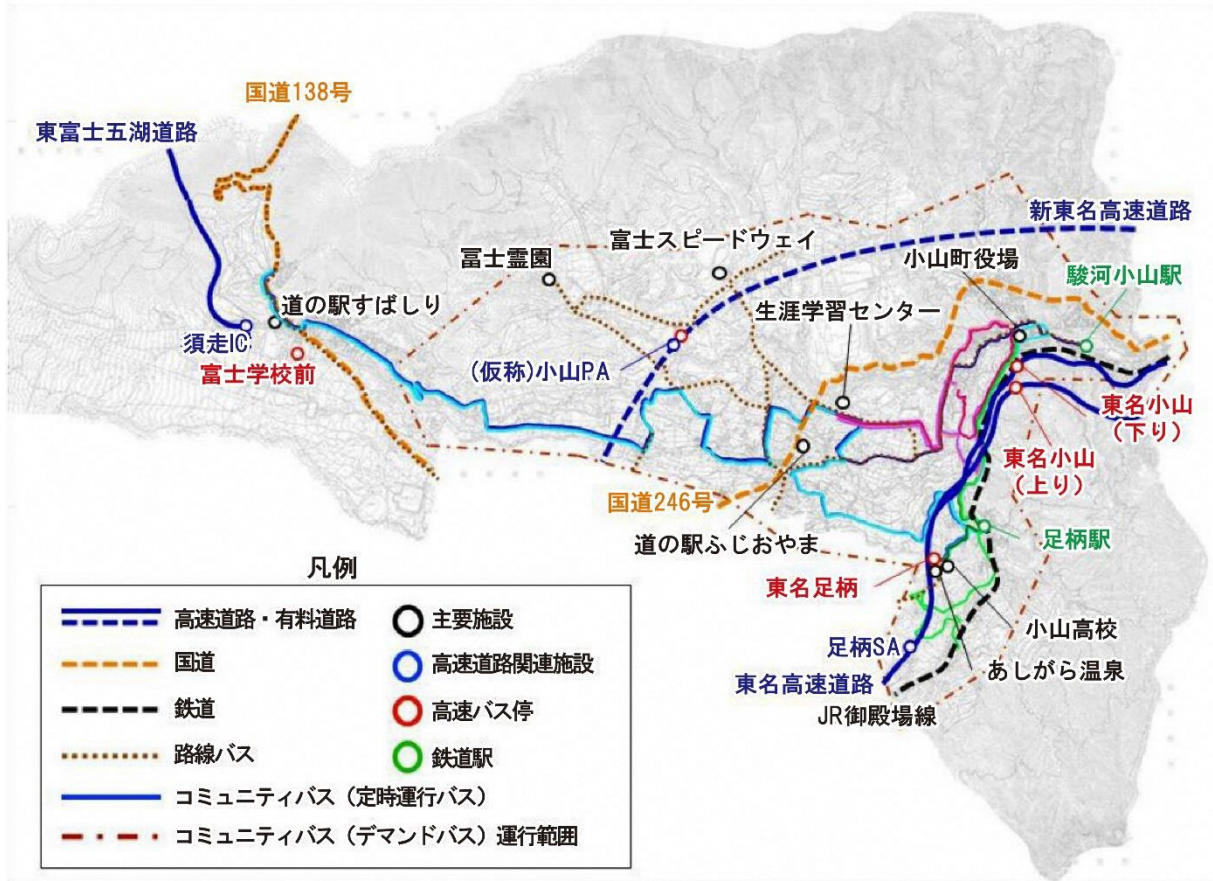


図1-25 交通機関の現状 (出典：おやまちょう 小山町地域公共交通計画)



図1-26 電化した御殿場線 (昭和43年)



図1-27 開通した東富士五湖道路 (平成元年)

6 観 光

本町は、世界文化遺産である富士山および関連する歴史文化資源をはじめ、豊門会館、足柄城跡といった史跡のほか、金時公園、富士霊園、富士スピードウェイなどの大型観光施設、11のゴルフ場、2つの道の駅、温泉施設など、豊富な観光資源に恵まれています。本町ではこうした豊富な資源を活かし、町全体を映像制作のメッカにすることを目指す「スタジオタウン小山」構想を推進しています。

さらに、東名高速道路足柄サービスエリアのスマートインターチェンジ開設や新東名高速道路の開通、(仮称)小山パーキングエリアと(仮称)小山スマートインターチェンジの開設など、高速交通基盤の整備による賑いの創出が期待されています。

本町における観光交流客数は、「道の駅ふじおやま」「道の駅すばしり」のオープン、さらには外国人観光客の急激な伸び等の影響を受け、平成23年度(2011)からは400万人を超える水準を維持してきました。しかし、世界的な新型コロナウイルス感染拡大でオリンピック・パラリンピックが延期となり、町内観光行事はほぼ中止又は延期、インバウンドは来日自体が制限されるなど大きな影響を受け、令和2年度(2020)は359万人に減少しました。今後は、ウィズコロナ、アフターコロナ下における有効な観光施策を展開していくことが重要です。

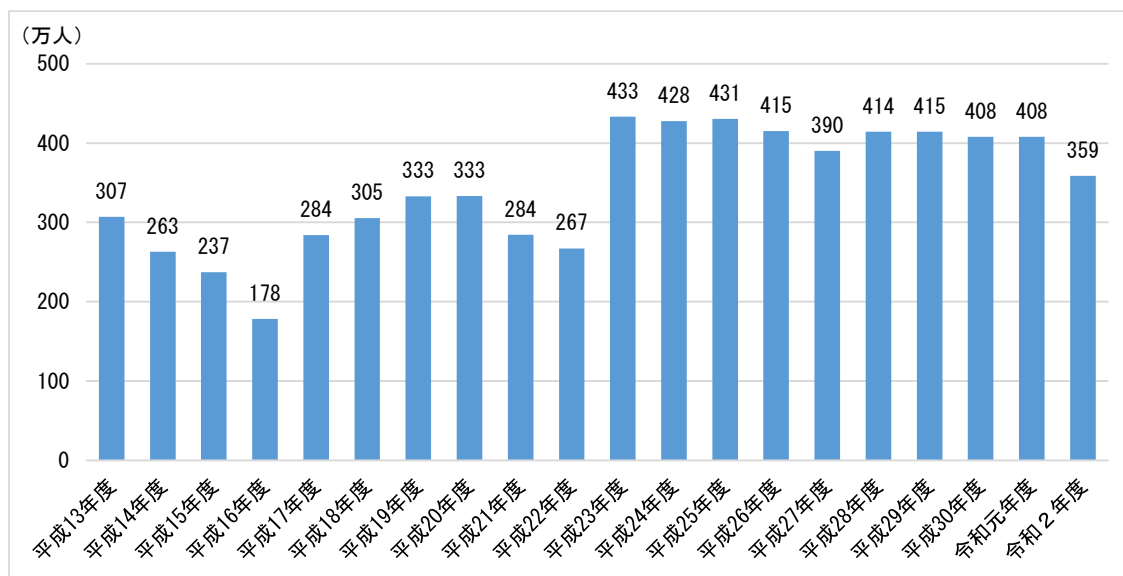


図1-28 小山町の観光交流客数の推移 (静岡県観光政策課)

第3節 歴史的背景

1 通史的概要

(1) 原始～古代

小山町域で最も古く人の姿の痕跡が認められる資料は、柳島沼子池畔の丘陵台地に占地する沼子遺跡から出土した約7,000年前（縄文時代早期前半）の土器片です。

獣を狩り、魚を捕り、木の実を拾ったりして生活していた縄文時代（1万年前～2,300年前）の人々が使った土器や石器は、生土や柳島・湯船・竹之下・足柄峠・桑木・一色・吉久保・須走などから出土しています。注目すべきは足柄峠から縄文土器が出土していて、当時からの人の往来が確認できることです。

稲作農耕が始まる弥生時代（2,300年前～1,800年前）になると、桑木・竹之下・須走などから土器など当時の生活道具が見つかっています。

今から約1,700～1,400年程前の古墳時代において、町内では、桑木に古墳があったと記す資料や、塚と名付けられた墳丘らしきものはいくつか見られますが、現在まで古墳として確認されているものはありません。ただし、この時代の遺物は、竹之下・桑木・上古城・須走などから出土しています。

律令制が成立すると、小山町域を含む周辺地域は「東海道駿河国駿河郡横走郷」という行政区分となりました。国の下の行政単位として「郡」が置かれ、駿河国は最も東にある駿河郡の他に志太、安倍、富士などの郡によって構成されました。駿河郡は、沼津市、裾野市、御殿場市など現在の市部と小山町や長泉町、清水町など現在の駿東郡の町を合わせた範囲とほぼ一致するとされています。

奈良時代から平安時代にかけては、官道としての東海道は足柄峠を通過していたことから、峠を往来する人々が急激に増加し、記録や歌などの文学に頻繁に町内の地名が登場するようになります。また、この地域には、足柄峠越えの拠点であり、東海道から甲斐への分岐点という機能をもった横走郷が存在し、横走駅や横走関があったと想定されています。

この「足柄」という地名については、現存する歴史書としては最古で、和銅5年（712）に完成した『古事記』に初めて現れます。そこでは、ヤマトタケルの行動として、「足柄の坂本に至った」ことが記されています。また、『常陸国風土記』には、足柄峠が東国との境界であったことが述べられています。

その足柄山の麓に位置する竹之下の上横山遺跡は、奈良時代から平安時代の遺跡



図1-29 沼子遺跡出土の縄文時代早期の押型文土器

で、^{ふじわらきょう}藤原京や^{へいじょうきょう}平城京、^{むさし}東北地方や^{むさし}武蔵地方、^{ひがしみの}東美濃、^{ととうみ}遠江、^{さがみ}相模、^{かい}甲斐などの土器が出土し、当時ここが交通の要衝であったことを示しています。

また、^{おやま}県立小山高等学校の敷地の^{よこやま}横山遺跡からは、古墳時代から平安時代にかけての大規模な集落や、大形の建物跡、大量の土器や金属器、古銭といった当時の賑わいを彷彿とさせる遺物や遺構が出土しています。

富士登山については、『^{ひたちのくにふとき}常陸国風土記』では「人民登らず」とあり、^{なら}奈良時代には登山が行われていなかったことが伝えられています。平安時代の初めには、^{えんのおつぬ}役小角のような^{しゅげんじや}修験者の活動が始まり、^{ふじさん}富士山が^{しゅげん}修験の霊山となっていたことが分かります。そして平安時代後期になると^{まつだいしやうにん}末代上人のような数百度に及び登山をした人物も現れてきました。

この時代の伝承として、「^{あしがらやま}足柄山の^{きんたろう}金太郎」がいます。「^{さかたのきんとき}坂田公時」、「^{さかたのきんとき}酒田金時」とも呼ばれ、「^{桃太郎}桃太郎」と並ぶ日本昔話の中の代表的な英雄の一人です。町内には、^{せいび}成美地区や^{あしがら}足柄地区を中心に数多くの^{きんたろう}金太郎の伝説地があります。^{きんたろう}金太郎伝説は、^{ふじわらのみちなが}藤原道長の隨身である「^{しもつけのきんとき}下毛野公時」の逸話が様々に発展した架空の物語です。しかし、町のシンボルとして、そして老若男女から慕われるキャラクターとして現在もその偉業と精神を伝えるべく祭り等が伝承されています。（^{きんたろう}金太郎伝説の詳細は、第2章を参照）

(2) 中世～近世

平安時代の後半から戦国時代初期にかけて、町域は^{いせじんぐう}伊勢神宮の^{おおぬまあゆざわみくりや}大沼鮎沢御厨の一部だったとされ、中世から現在まで^{ほくすん}北駿地方を指す地名として「^{みくりや}御厨地方」が通称になっています。^{すそのし}裾野市北西部から^{ごてんばし}御殿場市・^{おやまちょう}小山町域を含むエリアと想定されています。

^{かまくら}鎌倉時代には、^{みなもとのよりとも}源頼朝が^{せい}征夷^{たいしやうぐん}大将軍となった翌年の建久4年（1193）に「^{ふじ}富士の^{まきがり}巻狩」を行い、^{おやまちょう}小山町域もその舞台となりました。この狩りの場で起こった^{そがきやうだい}曾我兄弟の^{あだう}仇討ちを物語にした『^{そが}曾我物語』には、狩りの範囲について「^{あしがら}東は足柄の峰をさかひ、北は^{ふじのすその}富士野裾野をかぎり、西は^ふ富

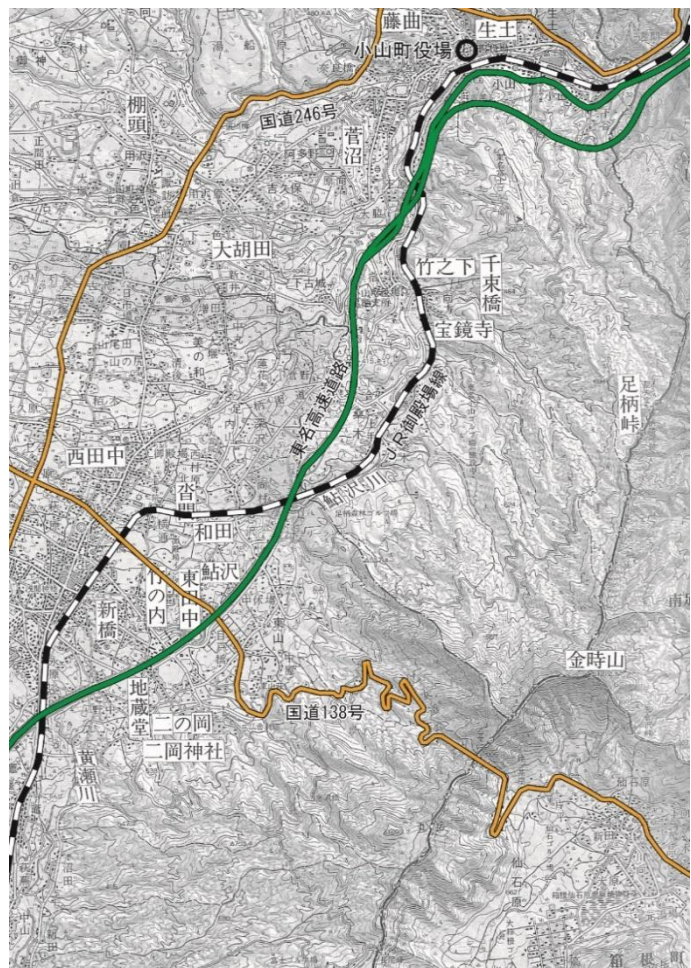


図1-30 ^{おおぬまあゆざわみくりや}大沼鮎沢御厨付近の地図

土川を際として」と書かれており、足柄山から富士川までの富士山の南側全域として
いることが分かります。現在も「頼朝伝説」として「頼朝の馬乗り石（馬蹄石）」や
「頼朝の足洗い井戸」などが残っています。

承久3年（1221）の承久の乱では、北条義時追討の院宣を書き、全国に発した
藤原光親が籠坂峠で処刑されました。この地には墓碑が建てられ、毎年供養祭が営
まれています。

室町時代には、御殿場市域や裾野市の一部などと共に小山町域も、大森氏一族の
支配するところとなり、生土の乗光寺・小山の正福寺・中島の勝福寺などが大森氏創
建の寺院と伝えられています。大森氏は現在の裾野市を発祥とし、東の箱根や北の
足柄方面に勢力を伸ばし、応永期には箱根山と北駿一帯を支配下に置いていました。

明応4年（1495）、相模の西部にも勢力を拡大していた大森氏は北条早雲のため
小田原城にて滅亡します。その後、駿東地方の支配者になった葛山氏は、戦国時代
のほとんどを、今川・武田・北条という有力な戦国大名に挟まれながらも、したた
かに生き抜いてゆきます。しかし、永禄12年（1569）頃を境に、今川方から武田
方への転身を図った葛山氏が北駿地方から姿を消し、小山町域は武田と北条の接点
として、支配をめぐる両者のつばぜり合いの場となります。天正18年（1590）、豊臣
秀吉の小田原城攻めにより北条氏滅亡後、秀吉の臣である中村一氏が駿府城に入
り、慶長5年（1600）まで当地方はその支配を受けます。

江戸時代の当町域の村は、阿多野・上野の両新田を除き、慶長6年（1601）よ
り沼津城主大久保忠佐の支配下にありました。忠佐の死後、慶長18年（1613）よ
り幕府の直轄領となり、その後元和3～5年（1617～1619）は徳川頼宣の支配下
にありました。頼宣の国替えにより再び幕府代官の支配下となり、その後寛永元年
（1624）より徳川忠長の領国となりました、さらに寛永10年（1633）より小田原
城主に加封された稲葉氏の領地に編入され、目まぐるしく支配者が代わります。

その後寛文12年（1672）、阿多野新田が開かれます。上野新田の成立については
よくわかっていません。天和3年（1683）より柳島・吉久保・大胡田・新柴・桑木・
下古城の6か村が稲葉紀伊守知行所となり、貞享3年（1686）より小田原藩主は大
久保氏に代わり、元禄12年（1699）より湯船・上野・上野新田・棚頭・菅沼・用
沢・阿多野新田・大御神・一色・上古城・中日向・下小林他13か村が大久保長門守
領となります。下古城・菅沼両村はこの時期に2村に分立しています。

宝永4年（1707）11月の富士山噴火の降砂の大被害により、翌5年町域の全村
が幕府領となり、伊奈半左衛門忠順の支配となります。懸命な復旧作業により、寛保
3年（1743）には小山・生土・中島・藤曲・下古城・所領・竹之下・須走・菅沼
の9か村が小田原藩領に復しますが、他の19か村は幕府領として残り、宝暦13年
（1763）より韮山代官所（江川太郎左衛門）に支配替えとなります。安永7年（1778）
より、大胡田村は大河内知行所を、一色村は山岡知行所を分郷し、阿多野新田は幕府

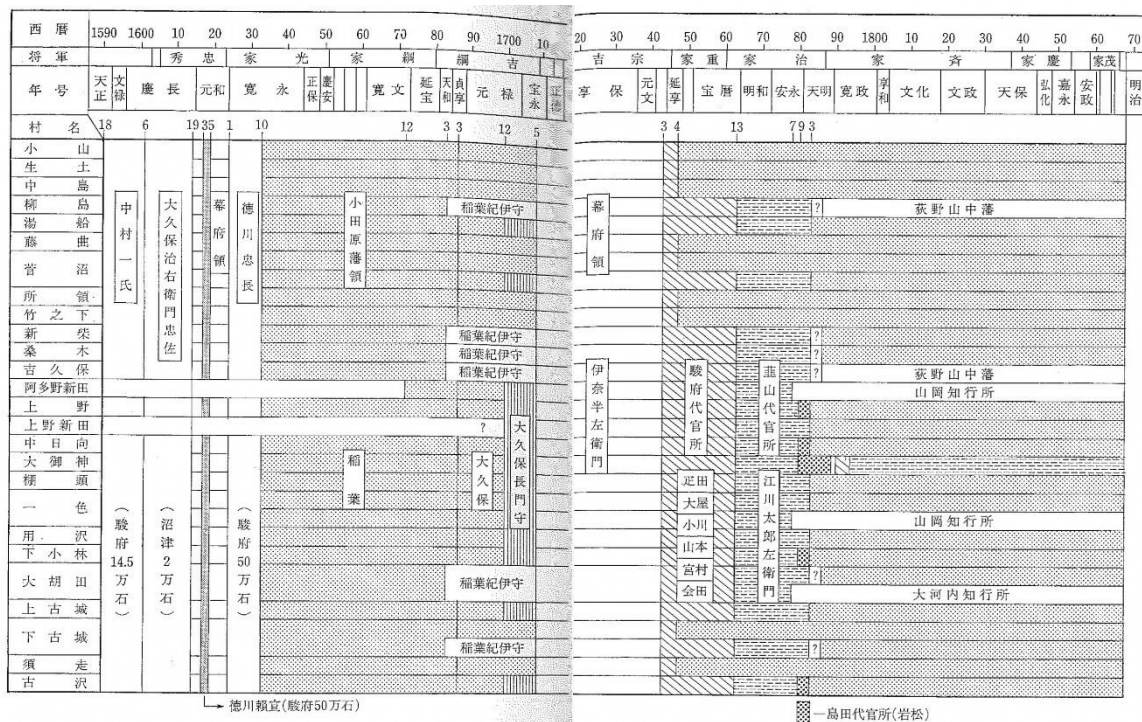
第1章 小山町の概要

領を離れて山岡知行所となります。同9年より大御神・中日向・上野・下小林他5か村は島田代官所支配に転じています。

宝永5年（1708）から幕府領であった18か村は、天明3年（1783）より2～3年の間に15か村が小田原藩領に復し、柳島・吉久保の両村も荻野山中藩領となり、大御神村はただ1村、引き続き幕府領として江戸時代後期を送ることになります。

平安時代から続く富士山の参詣については、江戸時代においても富士山は信仰の山として江戸の村々や関東の村々から多数の参詣者を集めていました。須走口でも、他の登山口と同様に参詣者の宿泊や世話をすることで須走村の経営を成り立たせていました。特に須走口の御師の旦那（顧客）は、相模、武蔵、下総、上総などの国々に及んでいました。

表1-3 小山町域村々の領主支配の変遷



(3) 近現代

明治維新後、当地方の村々は小田原藩から駿府藩（静岡藩）へ領分替えになります。明治4年（1871）7月の廃藩置県後、現在の神奈川県に「神奈川県」「小田原県」ができ、当初小山町域は「小田原県」に属していました。その後まもなく「静岡県」に配置され、静岡県の下で明治5年（1872）の戸籍編成、学制頒布、明治8年（1875）から明治15年（1882）にかけて地租改正事業がすすみました。この土地改革は広大な富士・足柄入会地の官民有区分や共有入会地の区域・権利関係の認知・協定など地元住民の生活を左右する重要問題でした。明治前期の地方制度は、明治5年の大区小区制から郡区町村制、連合戸長役場設置を経て町村制が施行されるまで目まぐるしく変わりました。

明治22年（1889）4月の町村制により、当地では六合村（^{ろくごうむら}小山・^{おやま}生土・^{いきど}中島・^{なかじま}柳島・^{やなぎしま}湯船・^{ゆふね}藤曲の各旧村）、菅沼村、足柄村（^{すがぬまむら}竹之下・^{あしがらむら}所領・^{たけのした}新柴・^{しりょう}桑木の各旧村）、北郷村（^{きたごうむら}大御神・^{おおみか}上野・^{うえの}中日向・^{なひなた}棚頭・^{たながしら}用沢・^{ようざわ}一色・^{いしき}古沢・^{ふるさわ}下小林・^{しもこばやし}阿多野・^{あだの}吉久保・^{よしくぼ}上古城・^{かみふるしろ}下古城・^{しもふるしろ}大胡田の各旧村）、須走村の5か村に統合されました。また同年、東海道本線が開通し、小山駅（大正元年（1912）から駿河駅、昭和27年（1952）から駿河小山駅）が開設されました。そして、鉄道幹線の開通で戦前期日本の基幹輸出産業であった蚕糸業の普及と拡大、日本の工業化を先導した富士紡の進出により、農作が中心であった村は新時代を迎えます。

富士紡が創業の地にした小山工場は明治31年（1898）、5万錘規模の運転を開始し、大正3年（1914）までに第1～第5工場が完成します。それと共に小山地区は発展し、大正元年8月1日、六合村と菅沼村が合併し小山町が発足しました。

大正12年（1923）9月1日の関東大震災は当地に大被害を与え、県内最大の被災地となりました。死者については、小山町が149人、北郷村が28人、足柄村6人を数え、特に富士紡では、123人が亡くなっています。

また昭和9年（1934）、東海道本線が熱海経由になり、これまでの幹線はローカルの御殿場線となります。

太平洋戦争末期の昭和20年（1945）5月頃になると、小山町上空にもB29をはじめとする米軍爆撃機が度々飛来し、空襲警報が頻繁に鳴り響きました。7月30日にはついに空襲を受けました。富士紡第1～5工場に爆弾が投下されるとともに、周辺の市街地や学校等へも無差別な機銃掃射を浴びせられました。その結果、18人が亡くなっています。

昭和22年（1947）、新憲法下地方自治法に基づく地方自治が発足し、農地改革や六三制教育が実施されます。一時軍需工場になっていた富士紡も紡績工場として復活し、昭和29年（1954）、自衛隊富士学校が須走地区に設立されました。その頃、町村合併の促進により小山町は昭和30年（1955）足柄村、翌31年北郷村（翌年古沢区分離）、須走村を合併し、新小山町が誕生、現在の町域に拡大しました。

1960年代の高度成長期以降、農業の後退、重化学工業化の中で富士紡の地位変化、東名高速道路の開通（昭和44年（1969））によるゴルフ場や霊園の開発、富士スピードウェイの開場などが続き、小山町の姿は大きく変貌していきました。

2 富士山噴火の歴史

富士山頂までが町域であることから、富士山噴火により、甚大な被害を受けてきました。ここでは、富士山噴火と小山町を舞台とした主な出来事について示します。

◆富士山の噴火

古文書などの記録によれば、天応元年（781）以降、富士山（新富士火山）の噴火を含む火山活動は次の通り記録されています。

宝永4年（1707）の富士山噴火に代表されるように町域は幾度となく富士山の噴火により破壊と再生を繰り返しました。

一方で、富士山は、火山活動への畏怖や感謝の思いなどの信仰を集めるだけでなく、豊富な湧水が町の産業発展にも深く関わるなど、本町の暮らしは富士山への思いと富士山のもたらす自然の恵みとともにあるといえます。

表1-3 有史以降の富士山火山活動の一覧

年代	現象	活動経過・被害状況等
▲天応元年(781)	噴火	8月。降灰。
▲延暦19～21年(800～802)	噴火	800年4月15日噴火、降灰多量、スコリア降下、溶岩流。噴火場所は北東山腹。 801年も噴火し、降灰砂礫多量、足柄路は埋没、802年に箱根路が開かれた。(VEI3)
826または天長3年(827)	噴火?	詳細不明。
▲貞観6～7年(864～66)	大規模：噴火	864年6月に噴火、降砂礫多量。噴火場所は北西山腹。長尾山付近から溶岩流出（青木ヶ原溶岩）、北西に流れたものは本栖湖に達し、また「せのうみ」を精進湖、西湖に二分、北東に流れたものは吉田付近に達する。この溶岩で人家埋没、湖の魚被害。噴火の最盛期は噴火開始約2ヶ月程度まで。マグマ噴出量は1.2 DRE km ³ 。
貞観12年(870)	噴火?	詳細不明。
貞観17年(875)	噴気	詳細不明。
▲承平7年(937)	噴火	噴火場所は北山腹。スコリア降下、溶岩流。
天曆6年(952)	噴火?	詳細不明。
正暦4年(993)	噴火?	詳細不明。
▲長保元年(999)	噴火	3月26日。詳細不明。
寛仁元年(1017)	噴火?	詳細不明。
寛仁4年(1020)	火映	秋。
▲長元5年(1033)	噴火	1月19日。スコリア降下、溶岩流。噴火場所は北山腹。
▲永保3年(1083)	噴火	4月17日。
応永33年(1427)	噴火?	詳細不明。
▲1435または永享7年(1436)	噴火	スコリア降下、溶岩流。噴火場所は北山腹。
▲永正8年(1511)	噴火	8月。
元禄16年(1704)	鳴動	2月4～7日。

年代	現象	活動経過・被害状況等
▲宝永4年(1707)	大規模噴火	12月16日噴火(宝永噴火)。軽石・スコリア降下。噴火場所は南東山腹(宝永火口)。 噴火1~2ヶ月前から山中のみで有感となる地震活動。十数日前から地震活動が活発化、前日には山麓でも有感となる地震増加(最大規模はM5級)。12月16日朝に南東山腹(現在の宝永山)で爆発し、黒煙、噴石、空振、降灰砂、雷。その日のうちに江戸にも多量の降灰。川崎で厚さ5cm。 噴火は月末まで断続的に起きたが、次第に弱まる。家屋・農地が埋まった村では餓死者多数。 初期はデイサイト、その後玄武岩のプリニー式噴火。江戸にも大量の降灰。噴火後洪水等の土砂災害が継続。マグマ噴出量は0.7 DRE km ³ 。(VEI5)
宝永5年(1708)	鳴動	10月28日。詳細不明。
宝永5~6年(1708~1709)	火山活動?	鳴動、降灰? 詳細不明。
文政6年(1825)	噴気、鳴動	時折。
嘉永6~7年(1854~1855)	噴火?熱?	詳細不明。
明治28年(1895)	噴気?	山頂火口縁東部の噴気活動活発化?
明治30年(1897)	噴気	山頂で噴気活動。温度は82℃。 ※この頃以降荒巻には噴気があったとの記録多数あり。
大正3年(1914)	噴気?	山頂火口縁南東部に新たな亀裂と噴気?
大正12年(1923)	噴気?	山頂火口縁北東部と北西火口縁(山頂火口壁)に新たな噴気? ※昭和11年(1936)頃から次第に活動は低下。1957年の調査では、噴気温度は約50℃。その後1960年代まで続いたが、1982年の気象庁の観測では噴気は見られなかった。なお、山頂以外では、1957年に宝永火口、須走登山道3、7合目で地熱があったとの報告もあるが詳細は不明。
大正15年(1926)	地震	8月13日。震央は富士山南東麓。
昭和62年(1987)	地震	8月20~27日。山頂で有感地震4回(最大震度3)。
平成12年(2000)および平成13年(2001)	地震	2000年10~12月。2001年4~5月。深部低周波地震の多発。
平成20~22年(2008~2010)	地殻変動	8月~10年初め。GPS連続観測から地下深部の膨張を示すと考えられる伸びの変化が観測されたがその後終息。
平成23年(2011)	地震	3月15日22:31 静岡県東部(富士山南部付近)でM6.4。震源から山頂直下付近にかけて地震が増加。その後地震活動は低下。
平成24年(2012)	噴気?	2月、北西麓の3合目付近(標高1760m)でごく弱い湯気。4月以降は認められなくなった。

気象庁ホームページ (https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/314_Fujisan/314_history.html)

▲は噴火年を示す。

3 人々の往来と領主、領地の変遷

足柄峠を代表とする交通の要衝のあった本町は、他地域との交流の痕跡が古くから残されており、その痕跡は縄文時代にまで遡ることができます。

また、奈良時代から平安時代になると、官道である東海道が足柄峠を通ることとなったため、足柄峠を往来する人々が急激に増加し、東海道から甲斐への分岐点である横走郷には駅や関も設けられました。鎌倉街道は、富士山の北麓を経由して、

甲府盆地と御厨地域（静岡県東部）とを結ぶ古代以来の主要道で、鎌倉往還や鎌倉道とも呼ばれました。

南北朝期に入ると、足柄峠周辺は日本を二分した戦いとして知られる竹之下の合戦の舞台となり、この合戦の伝承地が数多く存在しています。

一方、平安時代以降は幾度か領主、領地の変遷を繰り返し、明治維新を経て、当地方の村々は駿府藩（静岡藩）から静岡県となりました。

竹之下の合戦

建武の新政時代の建武2年（1335）12月11日から、足利尊氏の呼びかけに応じた足利軍と、後醍醐天皇の宣旨を受けた新田義貞に参集した軍勢との間で行われた合戦で、竹之下周辺が合戦の舞台となりました。後醍醐天皇が建武政権に反旗を翻した足利尊氏を討つために新田義貞を派遣しましたが、失敗し建武政権崩壊へとつながりました。

4 産業の発展

明治22年（1889）の東海道本線開通に伴い、小山駅が開設され、蚕糸業の普及拡大、富士紡績株式会社の進出など、本町の産業はそれまでの農作と山稼ぎから大きく変貌しました。その後、大正12年（1923）9月1日の関東大震災や昭和20年（1945）の空襲、度重なる台風の被害など乗り越え、町域は発展していきます。

また、1960年代の高度成長期以降は、東名高速道路の開通（昭和44年）によるゴルフ場や霊園、富士スピードウェイの開場などが続き、近年では新東名高速道路の開通に合わせ、ふじのくにフロンティア（（旧）内陸のフロンティアを拓く取組）による企業誘致等が進むなど、本町の姿は大きく変貌しています。

5 地区別の歴史

ここでは、先述した町内5地区の歴史概要について個別に示します。

（1）成美地区

◆成美地区の成り立ち

成美地区は大正元年（1912）の合併前の旧六合村の範囲にあたります。六合村の名は、合併前の小山村、生土村、中島村、柳島村、湯船村、藤曲村の6村が合併したことに由来しています。六合村として合併する前の明治5年、合併前の6か村は各村内の社寺に仮教場を設け教育を行っていましたが、6か村の協議の上、中央にあたる藤曲浅間神社境内に「成美舎」を建設しました。これが現在の成美小学校の前身にあたります。

また、伝説として、中島には、本町のシンボルである「金太郎」の生家があったと言われています。その場所は現在「金時神社」として地域の方々により護られています。また、金時神社の拝殿の横には、金太郎の産湯を汲んだと伝わる「産湯の七滝」があります。隣の柳島には、金太郎が泳いだ池と伝わる「沼子池」や湯船には金太郎の母が安産と子の健康を祈ったと伝わる「子産明神」が残されています。

◆原始～古代 「成美地区のはじまり」

成美地区の生土や湯船・柳島には縄文時代の土器や石器が多数出土していて、早くから人が住んでいたことが分かります。

当時の人々は日当たりがよい、森が近い、水が確保できる土地を求めて生土（音淵含む）や湯船・柳島に集まってきたと考えられます。

なお、成美地区には弥生時代の遺跡は発見されていません。

◆中世～近世 「有力者による支配と所領の変遷」

中世において北駿地方を支配した大森・葛山一族は、系図によれば平安時代から地元各地区の有力者たちと婚姻関係を結びながら支配地を広げていきました。

室町時代になると、大森一族の支配するところとなりました。

生土の乗光寺、小山の正福寺、中島の勝福寺などが大森氏によって建てられました。

各地区にそれなりの人数が住んでいたと考えられます。

その後、大森氏は北条早雲のために滅亡し、成美地区は葛山氏の支配となります。葛山氏の後は武田氏と今川氏・北条氏の接点の場所として、支配をめぐる三者の争いに度々巻き込まれました。

江戸時代になると、支配先が幕府領、小田原藩領と目まぐるしく替わるようになりました。宝永4年（1707）の富士山噴火の折には、降砂の大被害により全村幕府領となり、伊奈半左衛門忠順が復興の指揮を執りました。

◆近現代 「六合村の成立と小山町の誕生」

明治維新後、御厨地方の村々は小田原藩から駿府藩へ領分替えになりました。その後、土地改革が多々ありましたが、明治22年（1889）4月の町村制で、小山村、生土村、中島村、柳島村、湯船村、藤曲村の六つの村を合わせて六合村としました。

また、同年に東海道本線（現御殿場線）が開通し、富士紡が進出してきました。明治31年（1898）、富士紡小山工場が操業を開始しました。それと共に六合村には多くの家が建ち、人口が急増しました。

大正元年（1912）8月1日、富士紡の意向により六合村と菅沼村は合併し、小山町となりました。

◆成美地区と富士紡

明治時代の半ば過ぎまで、六合村と呼ばれた成美地区は田畑が広がるのどかな田園地帯でした。

富士紡の操業が始まると、六合村と菅沼村の人口が増え、商店が立ち並び、大変にぎやかになりました。両村合わせて2,200戸余り、人口約16,000人にもなりました。この頃に、工場に通いやすい音漕、落合、川前、生土などに社宅や寮が建てられました。

戦時中は一時軍需工場になっていた富士紡も、戦後は紡績工場として復活しました。富士紡は社員の健康や娯楽、福利厚生の一環として、診療所や映画館も造りました。そして、社員だけでなく、一般の人にも開放しました。当時の成美地区の生活や文化の程度を引き上げてきました。

また、駿河小山駅前通り、音漕通り、落合通りなど、たくさんの商店街ができ、成美地区はどこへ行っても人で溢れ、活気のあるところでした。成美小学校は、富士紡ができてから昭和40年（1965）くらいまでの間、児童数が1,000人を超えており、一番多い時には1,800人以上も在籍していました。

日本の工業が軽工業から重工業へシフトし、1990年代になると富士紡の勢いに陰りが見られるようになりました。それにつれて、成美地区の賑わいも減少してきました。

このように成美地区は、富士紡の盛衰と大きく関わってきた歴史があります。

(2) 明倫地区

◆明倫地区の成り立ち

明倫地区は、合併前の旧菅沼村、旧所領村の範囲にあたります。地区名および範囲は現在の明倫小学校に由来するものですが、明倫小学校の沿革は明治14年(1881)の菅沼小学校、さらにその前身となる菅沼村崇広館に遡ります。ここでは、旧小山町の前身となった菅沼村を中心に概要を説明します。

文政3年(1820)に桑原藤泰が駿河国の名所や旧跡について記した地誌『駿河記』によれば、「昔、広い沼があって、菅が繁っていたのでその名がついた」と書かれています。その広い沼のうち、今の小字の「菅沼」あたりがまず開発され、そこに開発領主である「土豪」が住んで、次第に周りを開発していったと推察されます。その土豪が明倫小学校近くの「岩田館」を住まいにしていたと考えられています。その館にはいくつかの頼朝伝説があり、昔、頼朝が富士の巻狩りをした折、ここに立ち寄り、家来の岩田兵部よりともに具足と田を与えた、と伝えられています。今も宅地内には「頼朝の馬乗り石」や「頼朝の足洗い井戸」の言い伝えが残されています。

◆原始～古代

明倫地区では、原始～古代の遺跡は見つかっていません。前述したようにかつて広い沼があったとされるこの地域は須川と鮎沢川の合流地点でもあり、かつては集落の形成が難しい場所であったか、あるいは河川氾濫等によりその痕跡が残っていないものと考えられます。

◆中世～近世

鎌倉幕府が滅びた後、建武2年(1336)には足利尊氏対新田義貞と朝廷方の戦いである「竹之下合戦」の戦場となり、その時の様々な伝説が今も伝わり、所領の白旗神社には戦死したと伝えられる二条為冬などその家臣75名がまつられています。

室町時代の1400年頃から明倫地区は田畑が広がり、早くから村が成り立っていました。

江戸時代になると、西山用水、下原用水、花戸用水、阿多野用水(北郷地区)などが引かれ、村々には豊かな実りをもたらしました。当時このあたりを支配していたのは、小田原藩でした。農民は年貢として米の他に、漆・ワラビ・スギネ・ヤマイモ・ススキ・コウゾ・薪など山からの採取物も納めていました。また、炭焼きは大切な稼ぎでした。

江戸時代後半になると、菅沼村は子弟の教育に力を入れ、村を豊かにするよう努めてきました。現在、10基もの筆子塚が残されていることから、教育に力を入れていたことがわかります。



図1-31 湯山文右衛門筆子塚

◆近現代

富士・箱根の山系からの豊かな水は、この地方の大きな財産です。明治22年(1889)、小山の地に東海道鉄道、今の御殿場線が開通して間もなく、ここを通った富田鐵之助氏(当時の東京府知事)は、豊かな水に着目しました。

一年を通して豊かな水があることを確かめ、明治28年(1895)6月、ここに紡績の工場をつくることになりました。当時の菅沼村と六合村の人口は約2,400人ほどでしたが、紡績会社創業のため、仙台方面から1,000人余の人

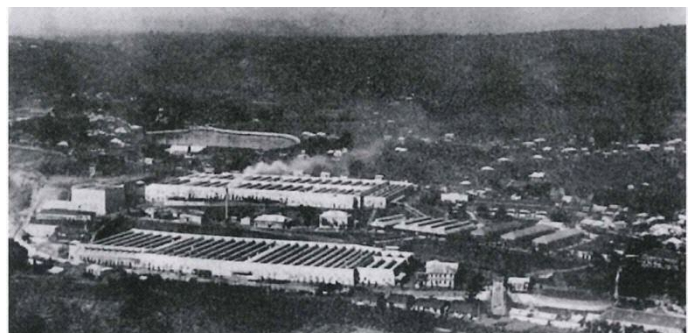


図1-33 富士紡 第一・第二工場全景
(昭和2年当時)

が招かれ、明治31年（1898）9月に富士紡が操業を開始しました。

その後、富士紡の意向により、大正元年（1912）8月1日、富士紡第一工場・第二工場のあった菅沼村と第三・第四工場のあった六合村は合併し小山町となり、現在に至ります。

（3）足柄地区

◆足柄地区の成り立ち

足柄地区は明治22年（1889）に旧竹之下村、旧所領村、旧新柴村、旧桑木村の合併により発足した旧足柄村を前身としています。主な集落は鮎沢川流域に形成され、東側は箱根外輪山の金時山を有し、東の足柄峠は東海道本線（現御殿場線）の開通までは神奈川県足柄地方への主要な道でした。

◆原始～古代

今から3,000年前の縄文時代、人々は自然に恵まれた山地の台地に住み、狩猟・採集の生活をしていました。新柴や竹之下の遺跡からは、縄文土器が発見されています。

弥生時代になると、水稻の栽培を行うようになり、低湿地の周辺に集落ができるのですが、足柄地区では台地の上の平坦地を利用して陸稲、ひえ、あわなどを作り、その周辺を住まいとしていました。竹之下や桑木の遺跡からは、弥生土器が発見されています。

奈良・平安時代には集落がつくられ、横山遺跡・上横山遺跡・南ノ原遺跡など多くの奈良時代の遺跡が確認されています。



図1-34 発掘された横山遺跡
（現在は県立小山高等学校敷地）

◆中世～近世

鎌倉時代初期に竹之下は宿や駅のある集落として開発されました。甲斐・信濃と伊豆・相模を結ぶ街道筋にあたるので、交通の要地となりました。また、足柄峠に関所を置いたことから、荷物の中継地として、また、情報交換の大事な場所としても栄えました。

また、町のシンボルとして親しまれている「金太郎」にまつわる伝説地もこの足柄地区には数多く伝えられています。山の名称にもなっている「金時山」は『駿河記』には、「公時山」として記されています。（金時（公時）山は文政2年（1819）が初出）この金時山の山頂には、「猪鼻神社」があり、金時が大イノシシの鼻を切って吊ったなど、いくつかの伝説が伝えられています。

その後、足利尊氏軍と新田義貞軍が激しく戦った「竹之下合戦」においては、足柄地区は戦場となり、足利幕府の始まりの活路を拓いた場所ともなりました。

そして戦国時代には、駿河・甲斐・相模の国境に位置していることから、今川、武田、北条の三強大名の勢力の接点となって戦乱の影響を大きく受けました。この国境の三角地帯に一時的な緊張緩和の空気が流れたのは、この三強の間に「三国同盟」が成立した戦国時代半ばの10年余りにすぎません。永禄11年（1568）に三国同盟が破れ、今川氏真が没落し、北条と武田が御厨地域の争奪を開始した翌年、足柄城が初めて文献に登場します。そして北条と武田は町のすぐ南にある深沢城の攻防戦を元龜2年（1571）にかけて行いました。これは、御厨地域の中でも特に竹之下地域の争奪を目的とした戦いであり、結局、深沢城は武田の手に落ち、御厨地域の軍事的、政治的拠点となりました。そのため、これに対抗する北条の前線基地としての足柄城の重要性が一段と高まりました。足柄城は国境を守り、本拠地小田原城を防衛する北西の最重要拠点として一層拡張、整備されていきました。



図 1-35 足柄城跡二の曲輪から検出された障子堀

江戸時代には、竹之下宿は上り下りの旅人や富士登山の人々の宿としてにぎわい、栄えました。

◆近現代

明治になると、当地は静岡県の管轄になりました。

東海道線（現在の御殿場線）が開通し、足柄街道を行き来する人たちが非常に少なくなり、宿駅として成り立たなくなりました。足柄村の多くの人は大変困り、養蚕を始めたり、スギ・ヒノキなどの植林をして林業を営んだりしました。また、足柄村の人々は、隣町の小山町で操業が始まった富士紡に勤めるようになりました。

昭和30年（1955）には、町村合併の促進により小山町と合併し、現在に至っています。現在は、興雲寺や宝鏡寺、足柄聖天堂など足柄地区の多くの神社やお寺で定期的にお祭りが地区民の手により開催され、そのお祭りを未来へつないでいます。

足柄峠

海拔759mにある足柄峠は、古くから足柄坂として知られ、東国と西国を結ぶ重要な路としてにぎわったところです。足柄峠や籠坂峠は多くの人たちが行き来し、新たに鎌倉時代において宿駅が設置された竹之下には将軍源頼朝、そして日蓮などが宿泊した記録が残ります。

現在、峠には足柄聖天堂や、新羅三郎義光吹笙の石、足柄の関跡の伝承地、足柄城跡などがあり、風光明媚な名所として、四季を通して多くの観光客が訪れます。

足柄の地名の由来

足柄の地名は、一説には、「足軽」に由来すると言われています。『新編相模国風土記稿』には、「足軽山は、此山の杉の木をとりて船に造るに、脚の軽き事他の材にて作れる船にことなり。よりてあしからの山と付たりと云々」（足軽山の杉の木をとって船を作ると、船足がたいへん軽く速くなり、他の木で作った船と異なっている）」とあります。『万葉集』にも足軽山の木の船は船足が軽いという歌が載っていますので、「船の足が軽い」という意味でこの「ア・シ・カ・リ」の名が起こり、山の名、また、山のふもとのこの地を足軽にしたという説があります。そして、「ア・シ・カ・リ」は「ア・シ・ガ・ラ」に変化して「足柄」の字が使われるようになったという説もあります。この呼び方は、神奈川県あしがらかみぐんの足柄上郡、足柄下郡、南足柄市などに使用されています。

一方、本町の「足柄」は足柄山の麓ということで明治時代から使われるようになったもので、近世までは「竹之下」「新柴」「桑木」などの地名が用いられてきました。

(4) 北郷地区

◆北郷地区の成り立ち

北郷は駿河の国の北端、北筋にある郷のことで、北筋13か村（下古城・大胡田・古沢・下小林・上古城・一色・用沢・棚頭・中日向・上野・阿多野新田・大御神・吉久保）を統合したのが北郷村です。御厨地方（小山町から御殿場市、裾野市北部）の中郷（高根地区）の北側に位置し、かつて周辺には、東郷（明倫・足柄地区）、西郷（原里地区）、南郷（御殿場地区）も存在していました。

◆原始～古代

「上野奥の沢遺跡」「一色遺跡」「吉久保遺跡」等の遺跡から、縄文時代の土器片が見つかっています。

◆中世～近世

戦国時代には、北条・武田・今川の勢力争いの場となりました。「用沢堀之内」「城之腰」「上古城」「下古城」等、お城にかかわる名残が、地名に残されています。

また、宝永4年（1707）11月23日、富士山の中腹で噴火が起きました。宝永の大噴火です。たちまちふもとの家や木々まで焼き、石と砂が村全域を覆いつくしました。北郷村では、火山礫（スコリア）が約1.5mも積もり、すべてが埋めつくされました。農民たちは田畑が埋まり、こ



図1-32 宝永噴火口

の先何年も作物ができないという絶望的な状態に追い込まれましたが、スコリアを取り除ける作業を続け、見事復興することができました。

江戸時代は、小田原藩に組み入れられ、宝永噴火（宝永4年（1707））後、幕府領となり、幕府代官伊奈半左衛門忠順・忠達のもとで救済と復興が図られました。

宝永噴火と前後して、元禄16年（1703）の大地震により阿多野用水が崩落し、水田に水が入らなくなったことで、新田村落として軌道に乗っていた阿多野新田は大打撃を受けました。阿多野用水の復旧が急務となり、トンネル方式の長さ6尺（約1.8m）、幅5尺（約1.5m）、長さ631間（約1,136m）の大工事を宝永2年（1705）から行うこととなりました。

この工事は昼夜を問わず続けられ、無事宝永4年（1707）10月に完成します。工事がようやく終わり喜びもつかぬ間、不幸にもわずか1か月後の11月23日、宝永噴火に見舞われました。田畑は1m以上の火山灰に覆われるとともに、完成した阿多野用水も埋もれ、享保元年（1716）の段階でもまだ復旧の状況は6割程でした。以後、阿多野新田の人々の復旧は長く続くこととなります。復旧を果たした阿多野用水は、現在も北郷地区から明倫地区の田に水を送り続けており、阿多野の「水掛菜」もこのめぐみを受けて毎年冬季に栽培がなされています。



図1-36 吉久保村絵図
(宝永5年(1708))

◆近現代

明治22年（1889）、用沢、棚頭、中日向、阿多野新田、大御神、下古城、吉久保、下小林、かみふるしろ、おおごた、うえの、いしき、ふるさわ、きたごうむら、13か村が合併し北郷村となりました。

その後の町村合併において、小山、御殿場とのつながりは同じ程度でしたが、富士紡をはじめとする工業が盛んで財政が豊かな小山町と昭和31年（1956）に合併しました。一方、北郷村の一部であった古沢地区は、御殿場市へ編入されました。

(5) 須走地区

◆須走地区の概要

須走の地名は戦国期から見られ、「洲走」とも書きます。『駿河記』によると、須走の語意は「直走（すくはしり）」の訓略と説明されています。これは富士山を横に見ながら麓を横に走っていくことを横走り、これに対して富士山に対してまっすぐ走ることを「直走り（すぐはしり・すばしり）」といい、今の須走の語源になったとい

われています。また、富士山の火山灰であるスコリアに覆われていることから、「砂走り」から「すばしり」に転じたとも言われています。

◆原始～古代

須走地区で人々の生活の痕跡がはじめて確認されるのは、縄文時代で、人々が使った土器や石器が出土しています。また、稲作農耕が始まる弥生時代になると、土器など当時の生活道具が見つかっています。特に西沢遺跡からは、「手焙り土器」という珍しい土器が発見されています。

古墳時代に入っても生活の痕跡がみられますが、現時点で古墳として確認されているものはありません。

◆中世～近世

室町時代には、富士山須走口登山道や登山者、宿泊施設などが、すでに存在していました。また、須走地区は駿河や相模と甲州を結ぶ、甲州街道の宿場町（中継地）として発達しました。さらに、中世末には富士信仰が盛んとなり、当時は御師の家が建ち並び、道者の登山にも重要な役割を果たしました。永禄6年（1563）と翌年の葛山氏元印判状等からは、当時関所が設けられ、通行税や入山税を徴収していたことがわかります。

◆宝永の噴火

江戸時代に入ると、宝永4年（1707）11月の富士山噴火の降砂の大被害により、当時の須走は壊滅状態となり、翌年には全域が幕府領の伊奈半左衛門忠順の管轄となりました。

町に残る複数の古文書によると、宝永の噴火で2～4mほどの火山灰が積もり、当時の家屋75棟のうち、37棟が焼失、残りの38棟は火山灰により埋没したとされ、その後火山灰の上に現在の須走地区の原型となる町が作られたとされています。

近年まで現在の町の下に当時の集落が埋もれていることは分かっていましたが、令和元年（2019）、令和4年（2022）に実施された発掘調査により、噴火に伴う火災により焼けたと思われる家屋の柱の跡、かやぶき屋根の一部とみられる炭化物、家屋の礎石か階段だった可能性がある石列、畑の畝などが発見されました。

遺物として、17世紀末の瀬戸美濃焼の^{すりばち}擂鉢、鉄製の鍋や片口、青銅製の急須などが出土しました。

宝永噴火後は幕府の援助によりいち早く復旧したことから、富士講の登山者が多く訪れ、賑わいを見せていたことが古文書の記録で分かっています。その後、明治時代に入ると養蚕業や寒天産業が盛んになりました。



図1-37 発掘された集落跡からの遺物

◆近現代

明治22年(1889)4月の町村制により、^{ろくごうむら}六合村、^{すがぬまむら}菅沼村、^{あしがらむら}足柄村、^{きたごうむら}北郷村、^{すばしりむら}須走村の5か村に統合されました。その後、昭和31年(1956)9月30日に^{おやまちょう}小山町が^{すばしりむら}須走村を編入し、現在に至ります。

6 継承の活動

町域では、歴史文化資源の継承に向けた取組が行われています。ここでは、代表的な取組をいくつかまとめます。

◆^{たけのしたたいこ}竹之下太鼓保存会

竹之下太鼓は江戸時代中期から伝わる民俗芸能で、かつては^{たけのした}嶽之下神社の例祭において^{だし}山車の巡行の折、山車の1階で^{たけのしたたいこ}竹之下太鼓をたたき、2階で踊りを踊っていました。太鼓の曲目は巡行の前に神社の境内で^{みやしやうでん}たたく宮昇殿、魂入れ、そしてークズシ、荷クズシ、新サンクズシ、五クズシ、七クズシがあり、巡行が終わるときにキリトウという太鼓を打ちます。昭和4年(1929)まで^{だし}山車による巡行が行われていました。

昭和4年(1929)以降、40年余り演奏されていみせんでしたが、昭和40年代に有志により結成された「^{たけのしたたいこ}竹之下太鼓保存会」が中心となり継承の取組が進められました。現在でも小学生らが太鼓の練習に励み、例祭や町内のイベントでその成果を披露しています。

◆^{ようさわかくら}用沢神楽保存会

^{ようさわかくら}用沢神楽の復活・継承は40年ほど前からはじまり、平成8年(1996)に「^{ようさわかくら}用沢神楽保存会」が正式に発足しました。地域の子供会と協力し、地元小学校の5、6年生が笛と太鼓の練習を行っています。

7 ゆかりの人物（没年順）

◆^{やまとたけるのみこと} ^{やまとたけるのみこと} 日本武尊（倭建命）

第12代景行天皇の皇子でオウスノミコトとも呼ばれた、大和朝廷の国土統一期に献身した英雄です。『古事記』や『日本書紀』の記述に登場する人物ですが、その実在性は不確かです。その記述によれば、天皇の命を受けて西征に発ち、奇計をもって九州の熊襲^{くまそ}を討ち、次いで「東の方十二道」の征討に赴き、その途次、伊勢でヤマトヒメノミコトから天叢雲劍^{あまのむらくものつるぎ}（のち草薙劍^{くさなぎのつるぎ}と称す）を賜り、東国では幾多の難に遭いながらも平定に成功しました。しかしその帰途、伊勢で亡くなりました。『古事記』によると、日本武尊は、小山町足柄峠^{おやまちょうあしがらとうげ}の頂に立ち「吾妻はや」と三度嘆いたとあり、そこから峠以東を「吾妻」と呼ぶようになったと伝えられています。

（参考 静岡新聞社「静岡県歴史人物事典」）

◆^{せいしょうなごん} 清少納言

^{こうほう} 康保3年（966）頃～^{まんじゆ} 万寿2年（1025）頃。父は歌人清原元輔^{きよはらもとすけ}。清原氏には和歌や漢学に精通した者も多く、恵まれた環境下に育ちました。^{しょうりやく} 正暦4年（993）頃から一条天皇の中宮定子^{ちゆうぐうていし}のもとに出仕し、約10年間の女房生活を送りました。多数の才媛に交じって才能を発揮し、快適な日々を過ごしましたが、中宮が死去した後、まもなく宮仕えを辞し、その後の清少納言の動静は明らかでなく諸説あります。日本三大随筆のひとつともいわれる『枕草子^{まくらのそうし}』は、この頃成立したものといわれます。「関は」の段には、「横走の関^{よこばしり}」が登場します。晩年は月輪^{つきのわ}（京都市東山区月輪町）に隠棲したとされています。

◆^{さかたのきんとき} 坂田金時（武将）

幼名金太郎^{きんたろう}で有名ですが、『今昔物語集』や『古今著聞集』、『御伽草子』などで説話として取り上げられ、酒吞童子退治の物語が成立しました。平安時代中期の武将源頼光^{みなもとのよりみつ}の四天王に「公時」という姓のない人物が登場し（今昔物語集）、大江山の酒吞童子退治の説話（御伽草子）が成立します。その公時の生誕地が小山町であるという伝説が伝わっています。

本町の坂田^{さかた}という地名や、金時^{きんとき}が育ったという金時山^{きんときさん}、その他、金時^{きんとき}が生まれたとされる「子産明神」や「姥の腰掛石」などの伝説が残っています。



図1-38 和漢英雄伝 金太郎
（箱根町立郷土資料館所蔵）
出典：文化遺産オンライン

◆ **源頼朝**

久安3年(1147)～正治元年(1199)。鎌倉幕府初代将軍、武家政治の創始者と評価される。源義朝の第三子、母は熱田神宮大宮司藤原季範の娘。平治元年(1159)12月、平治の乱に敗れて平氏に捕らえられ京都へ送られましたが、平清盛の継母池禅尼の助命嘆願で一命を助けられ、伊豆蛭ヶ小島(田方郡韮山町)に流されて、伊東祐親、北条時政らの監視を受けました。以来治承4年(1180)の拳兵まで伊豆で暮らしました。以仁王の令旨を受け、諸国の源氏が反平家の軍を起こした時、北条時政の支援を受け三島大社の祭礼の日に拳兵し、梶原景時らの協力もあって鎌倉に到達しました。その後富士川の合戦で平維盛、忠度らの大軍を破り、その勢いのまま京都へ上ろうとしましたが、常陸に佐竹氏を討ち関東の安定を図るとともに、駿河国や遠江国に拠点をも固めました。寿永2年(1183)後白河法皇の命を受けて範頼、義経らを西上させ木曾義仲を近江(滋賀県)に破り、引き続いて平氏を一ノ谷、屋島、壇ノ浦に追い滅亡させました。それだけでなく義経が公家勢力と結びついたことから義経追捕の名目で諸国に守護・地頭を配置し、軍事警察権を掌握しました。そして建久3年(1192)に征夷大将軍となりました。その後、『吾妻鏡』によれば、現在の御殿場市や小山町において大規模な巻狩を実施したとされ、現在も伊豆国や駿河国東部には、頼朝にかかわる伝説が多く残されています。

(参考 静岡新聞社「静岡県歴史人物事典」)

◆ **藤原光親**

安元2年(1176)～承久3年(1221)。鎌倉時代初期の公卿。権中納言、正二位。葉室中納言光雅の子。後鳥羽上皇の院司となり、上皇の討幕計画の無謀さを諫めましたが聞き入れられず、承久3年(1221)の承久の変に先立ち、北条義時追討の院宣を起草しました。この院宣起草の責任を問われ六波羅に捕らえられ、甲斐の武田五郎信光に預けられるため京より下りました。光親が車返(沼津辺り)まで来たとき、幕府の使者が来て、光親を誅せという命令があったため、武田信光は加古坂(籠坂)まで行き、ここで斬殺梟首としました。その様子は『承久軍物語』(五)で詳しく述べられています。斬刑の場所は籠坂峠の西方矢筈山付辺であったといわれており、小山町には土地の有志によって「権中納言藤原光親卿之塚」と刻んだ墓碑が建てられています。

(参考 静岡新聞社「静岡県歴史人物事典」)

◆ **日蓮**

貞応元年(1222)～弘安5年(1282)。鎌倉時代法華信仰を布教し、日蓮宗(法華宗)を開創した僧。安房(千葉県)に生まれ、清澄寺で出家して天台僧となり、のち鎌倉や京畿で修学、法華経の教えが真実最高の教えであるとの法華経至上主義に到達。建長5年(1253)清澄寺でこれに基づく浄土教批判を初めて行いました

(いわゆる日蓮宗の立教開宗)。このため浄土教信^{しんぼうしゃ}奉者に^{ききん}圧迫され、鎌倉に出て布教し、やがて地震、飢饉など災害が続出すると、その原因と対策を『立正安国論』に記し、文^{ぶんお}應元年(1260)に北^{ほうじょうときより}条時頼に提出しました。その趣旨は浄土教の禁^{きん}庄と正しい法華信仰の勧めにあったため、鎌倉幕府に捕らえられ伊豆伊東に流刑されました。赦免後安房に帰り、教えを広めましたが、同地の浄土教信^{しんぼうしゃ}奉者の襲撃を受けて、再び鎌倉に戻りました。文^{ぶんえい}永5年(1268)に日本の服属を促すモンゴル帝国(元朝)の国書が到来し、『立正安国論』で指摘した他国からの侵略が現実化したことで、日蓮の信^{しんぼうしゃ}奉者も増大しました。彼らや日蓮の法華経^{ほっけきょう}一^{たくいつ}主^{しゅ}義^ぎに基づく言動が急進化し律^{りつ}諸^{しよ}宗^{しゆ}への批判も激化したため、幕府は蒙古防衛体制確立の見地から弾圧し、日蓮を佐渡に流しました。しかし日蓮は『開目抄』、『観心本尊抄』等を著し、自己の宗教の理論化を達成しました。文^{ぶんえい}永11年(1274)に赦免され鎌倉に帰りましたが、同年甲斐^{かい}国^{のくに}身^{みの}延^{えん}に入山、弟子や信^{しんぼうしゃ}奉者の指導に当たりました。日蓮は久遠寺に向かう途中、竹之下で宿泊したという記録があります。弘安5年(1282)病氣療養のため常陸^{ひたち}に向かう途中、竹之下に再び宿泊しましたが、10月12日武蔵^{むさし}国^{のくに}池上^{いけがみ}で没しました。

(参考 静岡新聞社「静岡県歴史人物事典」)

◆あしかがたかうじ 足利尊氏

嘉元3年(1305)生、延文3年(正平13年)(1358)没。室町幕府初代将軍。貞^{さだ}氏の子。初め太郎、高^{たか}氏と称しましたが、のち後醍醐天皇の謹を得て尊氏と改名しました。元^{げん}徳3年(元弘元年)(1331)の元弘の変で鎌倉幕府の命を受け西上、後醍醐天皇を笠置山に攻めましたが、早くから源氏再興の志があり、正^{しょう}慶2年(元弘3年)(1333)再度の西上に際し、高^{たか}氏は丹波篠村八幡宮で幕府への反旗をかかげ、六波羅を滅亡させました。建武2年(1335)、北条時行の乱鎮圧のため鎌倉に下り、次いで新田義貞征伐を名目として建武政権にそむき、小^お山^{やま}町^{ちやう}竹^{たけ}之^の下^{した}周辺で行われた竹^{たけ}之^の下^{した}の合戦で義貞軍を破り、大挙上洛しました。翌年京都の合戦に敗れて九州に逃れますが、再度上洛し兵庫湊川で楠木正成らを破り入京し、光明天皇を擁立し、幕府を開きました。対して後醍醐天皇は吉野に走り南朝を立てたことから、南北両朝対立の大内乱が発生しました。暦^{りやく}應元年(延元3年)(1338)に征夷大將軍となりましたが、弟直義と対立したことから一時南朝に帰順したものの、観^{かん}心^{しん}3年(正平7年)(1352)に直義を殺害し、さらに庶長子で直義の養子となった直冬とも対立しました。それ以後は南朝・直冬党と争いましたが、延文3年(正平13年)(1358)に九州親征の計画中に病死しました。

(参考 静岡新聞社「静岡県歴史人物事典」)

◆^{きたぜんざえもん}喜多善左衛門（新田開拓者）

生没年不詳。寛文期（1661～1673）の人。^{あだのようすい}阿多野用水を開削し、^{あだのしんでん}阿多野新田を開発しました。^{えど}江戸の商人と伝わっています。^{ゆぶねむら}湯船村名主^{いけやいちざえもん}池谷市左衛門の要請により、^{あだのしんでん}阿多野新田の開発の金元となり、寛文8年（1668）11月、^{おだわらはんしゅいなばみののかみ}小田原藩主稲葉美濃守に^{おおみかぬのびきだき}原野開墾を請願しました。水源を大御神布引瀧に求め、その下流に長さ50間、幅32間の堤を築き、トンネル5か所、453間、水路5,981間に及び工事が寛文12年（1672）に完成しました。開田面積25町8反余、^{ぜんざえもん}善左衛門は工事完成直前に没しますが、子の長十郎が父の遺志を継ぎ、完成させました。

（参考 静岡新聞社「静岡県歴史人物事典」）

◆^{いけやいちざえもん}池谷市左衛門（新田開拓者）

生没年不詳。^{あだのしんでん}阿多野新田開発の発起者。寛文8年（1668）、^{するがのくにゆぶねむら}駿河国湯船村の名主。寛文4年（1664）に江戸のすみや^{うえもん}宇右衛門と組み、^{あだの}阿多野の原野の新田開発願書を提出した^{ゆぶねむら}湯船村・^{きへいじ}喜平治の後を継ぎ、開発を発起。寛文8年（1668）江戸材木町の^{きたぜんざえもん}喜多善左衛門を金元として、^{おだわらはん}小田原藩に開発願書を提出、用水開削を起工。^{おおみかぬのびきだき}大御神布引瀧を水源に横50間、長さ32間の貯水池を築き、水路5,981間、内トンネル453間に及び^{あだのようすい}阿多野用水を完成させました。寛文12年（1672）竣工により、荒地から25町8反と畑24町歩の新田が完成。昭和45年（1970）^{あだの}阿多野に顕彰碑が建てられました。

（参考 静岡新聞社「静岡県歴史人物事典」）

◆^{い なはんざえもんただのぶ}伊奈半左衛門忠順（関東郡代）

寛文12年（1672）～正徳元年（1711）。江戸時代前期の関東郡代（五代目）。代官伊奈家次（^{い ないえつく}最初の関東郡代、^{えんしゅうてらだにようすい}遠州寺谷用水の建設者）の子孫で、^{い なはんじゅうろうただつね}伊奈半十郎忠常の二男。通称半左衛門。宝永4年（1707）^{ふじさん}富士山の噴火で^{えいざん}宝永山ができた時、噴出した土砂と火山灰は須走付近で3m、^{おおみか}大御神付近で1.5mあったといわれています。幕府は被災地59か村の復興を図るため天領として関東郡代^{い なはんざえもんただのぶ}伊奈半左衛門忠順を派遣し、諸国の公私領に1,000石につき2両の救援金を出させ40万両を集めました。実際に救援に充てられたのは16万両余であったといえます。被災者には一日につき米男2合、女1合、馬一頭に銭20文を一年半にわたって与えました。^{とくとみそほう}徳富蘇峰や^{わたなべたんじ}渡辺丹治により幕府米蔵の貯蔵米を百姓に与えたというエピソードを創作し、^{よしく ほみずじんしゃ}吉久保水神社にそれを刻んだ石碑を建立しました。その後、新田次郎はその内容をもとに小説『怒る富士』を書きました。



図1-39 ^{い なはんざえもん}伊奈半左衛門像
(伊奈神社)

現在は須走地区の伊奈神社と吉久保地区の水神社にてその功績を称える石碑が残っています。

(参考 静岡新聞社「静岡県歴史人物事典」)

◆食行身祿 (宗教家)

寛文11年(1671)～享保18年(1733)。日本の宗教家であり、富士講の指導者。本名は伊藤伊兵衛。一志郡川上村(現在の三重県津市美杉町川上)の農家に生まれ、13歳の時に伯父を頼って江戸に出て奉公し、その後独立して呉服店を持つなど成功を収めました。一方で富士山への信仰心が強く、17歳の時に、富士講の祖・長谷川角行の流れを汲む月行の弟子となりました。その後、修行を積んで富士行者となり、「食行身祿」を名乗りました。享保18(1733)年、身祿は富士山の烏帽子岩で断食入定を始め、高弟の田辺十郎右衛門父子に「三十一日の巻」を口述し、35日後に入定(絶命)しました。その後身祿の考えを支持する人々によって関東地方を中心に富士講が盛んとなり、富士講隆盛の礎を築きました。

(参考 三重県津市 広報津 歴史散歩95「富士講の祖 食行身祿」ほか)

◆二宮尊徳 (経済家)

天明7年(1787)～安政3年(1856)。経済家。相模国栢山村(神奈川県南足柄市)に生まれ金次郎と称しました。質素倹約を旨とし、報徳仕法の開祖となりました。幼少より独学で学び、30歳の頃、小田原服部家の財政再建に成功し、小田原藩主の目にとまります。文政4年(1821)、藩主より同領内や下野桜町領(栃木県)の復興を命ぜられ、これに成功しました。その間、飢饉で疲弊した御厨領(御殿場市、小山町)の農村復興にもあたり、御厨の大多数の村々が報徳仕法をとりいれ、復興に成功。特に藤曲村では、天保7年(1836)頃からこの仕法を導入、尊徳の没する2年前の嘉永7年(1854)まで、その指導を受けたことを示す数多くの史料が残っています。安政4年(1857)、村人によって建てられた墓碑が、藤曲浅間神社に残っています。



図1-40 二宮尊徳像

(参考 静岡新聞社「静岡県歴史人物事典」)

◆滝沢唯念 (唯念上人)

寛政3年(1791)～明治13年(1880)。浄土宗系の専修念仏行者。肥後国八代(熊本県八代市)に生まれ、22歳のとき下総行徳(千葉県)の徳願寺で受戒しました。全国各地で修行し、文政13年(1830)、「富士山の麓奥の沢にて修行三カ年」の後、奥の沢に堂を建て、明治7年(1874)、浄土宗増上寺の末寺として認可を受

け、滝沢寺の号を教部省より認可を受けました。

五穀を断ち、そば粉を水で練ったものを常食とし、人々の安穩を祈るため、ひたすら念仏を唱えた厳しい修行姿から、「木食念仏行者」とも呼ばれました。唯念が民衆への布教や講活動の運営に際し、自ら書き与えた南無阿弥陀仏の名号や、火伏せの竜などが現在も数多く残っています。また、独特の書体の名号碑も駿東、伊豆、西相模に数百基が残っています。墓碑は奥の沢の開山堂脇に建っています。

(参考 静岡新聞社「静岡県歴史人物事典」)



図1-41 唯念名号碑
(町指定文化財)

◆ 榊研三 (教育者)

嘉永2年(1849)～明治29年(1896)。学制初期の教育者。尾張国北方村(愛知県一宮市)に馬場外次郎として生まれました。明治8年(1875)伊豆国徳倉村(三島市)榊家の養子となり、榊研三と名乗りました。鷲津毅堂、大槻修二、名和謙次などに和漢学、習字、代数教授法を学びました。明治9年(1876)、駿東郡成美舎教員になりました。御厨教育会会長就任後には、自由民権思想をとがめられ教員免許状を被収、訓導職を免ぜられました。明治20年(1887)、駿東高等小学校に復帰、明治25年(1892)、駿東郡六合村立成美尋常小学校訓導となり、翌年同校校長に任ぜられました。明治28年(1895)六合村学務委員に就任しましたが、翌年病死しました。思想的には、自由民権運動に共鳴し、演説結社の弁士として活躍しました。文化的にも詩歌、書画、俳句などの文芸サロンに参加し、作品を寄せ、地元の文化人に影響を与えました。墓所は藤曲。成美小学校に頌徳之碑があります。

(参考 静岡新聞社「静岡県歴史人物事典」)

◆ 室伏董平 (政治家)

安政3年(1856)～明治34年(1901)。政治家。駿東郡生土村に書家室伏良庵(小入郎)の長男として生まれました。幼くして米山蓉谷、中垣秀実、小永井岳などに漢籍を学びました。明治12年(1879)駿東郡成美舎幹事となり、以後生土村学務委員、生土村会議員、沼津本町外161か町村連合会議員、御殿場村外64か村連合会議員、菅沼村組戸長などを歴任しました。その間、主として学務委員、衛生委員、税調査委員などとして活躍し、学校設備の充実、改善などに意を注ぎました。その後も駿東郡教育会長、駿東郡会議員、参事官、議長、県会議員などに当選歴任しました。二宮尊徳の報徳仕報の熱心な実践者でもあり、勤儉節約を旨とし



図1-42 室伏董平

した。政治活動としては明治14年（1881）静岡県改進黨員となり、自由民権運動にも参加しました。大正6年（1917）菩提寺の正福寺に顕彰碑が建てられました。墓所は乗光寺の室伏家代々の墓地にあります。

（参考 静岡新聞社「静岡県歴史人物事典」）

◆天野幸逸郎（戸長）

文政5年（1822）～明治38年（1905）。近世大御神村名主。駿東郡大御神村の人。伝右衛門。明治になり戸長、第一大区五小区区長などを務めました。大御神村に水路の開削を発起し、弘化4年（1847）より工事を開始、水路の長さ2,300m、この内水門・隧道は12か所、水田2.6haの開田に成功。全工事が完成をみたのは、明治16年（1883）でした。また、山林の共有権の確立、植林などの事業にも尽力しました。丹城と号し、文化・宗教面においても、漢詩を好み、木食行者たちのパトロンとなるなど、幅広く活動しました。大御神では碩徳碑を建て、毎年8月に「丹城祭」を実施しています。

（参考 静岡新聞社「静岡県歴史人物事典」）

◆濱口吉右衛門（実業家、政治家）

文久2年（1862）～大正2年（1913）。紀伊国有田郡出身。濱口熊岳の次男として生まれ、9歳で江戸に出て、漢学塾にて学び、その後慶應義塾で洋学を修めました。9代目濱口吉右衛門として日本橋小網町の老舗醤油問屋「廣屋」を引き継ぎました。明治29年（1896）、第4回衆議院議員総選挙補欠選挙に出馬し当選。3期連続で衆議院議員を務め、財政整理国本培養論を献策して注目を集めました。明治33年（1900）に辞職。鐘淵紡績重役、富士瓦斯紡績・九州水力電気・高砂製糖社長、豊国銀行頭取、朝鮮銀行幹事、濱口代表社員、猪苗代水力電気取締役等を歴任し、実業界に貢献しました。



図1-43 濱口吉右衛門

（参考 小山町「富士紡績(株)創設と再建」ほか）

◆富田鐵之助（藩士、官僚、実業家）

天保6年（1835）～大正5年（1916）。仙台藩士富田実保の四男として生まれ、勝海舟に師事し、慶応3年（1867）幕命により米国に留学し、在米中明治維新となりました。明治2年（1869）政府の留学生になり、ニュージャージー州のニューアーク商業学校に入学して経済学を学びました。明治5年（1872）岩倉欧州使節団に加わり、大久保利通や伊藤博文にその能力を買われて同年2月ニューヨーク在勤領事心得（直後に副領事）に抜擢。その後上海総領事、外務省少書記官、英国公使館1等書記官等を歴任しますが、明治14年（1881）大蔵省に転じ大蔵権大書記官を任

ぜられ、横浜正金銀行管理掛を命ぜられました。翌年には大蔵大書記官となり日本銀行の創立事務を担当。日本銀行創立とともに同行副総裁、明治21年（1888）第2代総裁となるも、明治22年（1889）9月に辞職。その後、貴族院議員、東京府知事を務めました。その他横浜火災保険、日本鉄道などに関わりました。また、富士紡の設立にも貢献し、明治29年（1896）2月に富士紡会長に就任。そして、明治34年（1901）に辞任しました。

（参考 筒井正夫「富士紡績株式会社設立に至る企業家ネットワークの形成」）

◆もりむらいちざえもん 森村市左衛門（実業家）

天保10年（1839）～大正8年（1919）。実業家。代々江戸京橋に住んだ土佐侯の用達商人。幼名市太郎。安政元年（1854）、2年続けて自宅を焼失し、資産を失いましたが、夜店を商い資産を回復しました。横浜貿易開始後、生糸・羽二重・陶器等の貿易で産を成しました。森村グループ（ノリタケ・TOTO・日本ガイシ・日本特殊陶業）の創設者であり、日本銀行監事でもあった市左衛門は、横浜生糸会社・富士製紙・第一相互生命・明治製糖等の会社に出資援助したほか、明治28年（1895）、駿東郡菅沼村に富士紡株式会社の工場起工にあたり、その発起人・出資者となり、明治30年（1897）、同社開業後は相談役となりました。大正4年（1915）、男爵を授けられました。明治39年（1906）、小山から富士紡一・二工場に渡る鮎沢川に「森村橋」が架かりました。

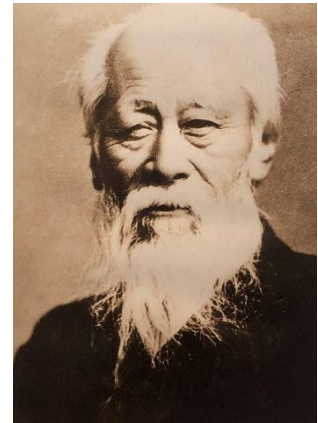


図1-44 森村市左衛門

（参考 静岡新聞社「静岡県歴史人物事典」）

◆ひびやへいざえもん 日比谷平左衛門（実業家）

弘化5年（1848）～大正10年（1921）。万延元年（1860）江戸に出て日本橋の綿糸商松本屋に奉公し、18歳で支配人の地位に就きました。明治11年（1878）日比谷ツネの養子となり、のち独立して日比谷商店を開店し、綿糸・綿花の卸商を営みました。明治29年（1896）商業から工業に転向を図り東京瓦斯紡績を設立し専務に就任。明治31年（1898）に小名木川綿布の取締役となり、翌年社長に就任。明治33年（1900）森村市左衛門の要請で経営不振の富士紡の取締役となり、明治36年（1903）小名木川綿布を富士紡に合併しました。明治39年（1906）富士紡と東京瓦斯紡績の合併により富士瓦斯紡績が成立し、社長に就任。さらに鐘淵紡績会長、日清紡績会長も務



図1-45 日比谷平左衛門

めるなど、日本の^{ほうせき}紡績界に大きな功績を残しました。大正8年（1919）日比谷銀行を設立。また第一生命保険、東京毛織などの重役や東京商業会議所副会頭なども歴^り任しました。「日本^{ほうせき}紡績界の巨人」、「実業界における起死回生の名医」と謳われ、富^し士^{ほう}紡の再建に大きく貢献しました。

（参考 日外アソシエーツ「367日誕生日大事典」）

◆^{かわさきえいすけ}川崎栄助（実業家）

嘉永4年（1851）～大正10年（1921）。12歳で横浜に出て足袋商の店に奉公し、明治7年（1874）独立して同地に店舗を開きました。明治10年（1877）に東京日本橋に移り足袋・木綿織物を製造販売しました。明治33年（1900）に当時経営不振に陥っていた^{ふしほうせき}富士紡績の改革に当たり、翌明治34年（1901）に取締役を務め、^{わたとよじ}和田豊治専務を助け社運の隆盛に貢献しました。また南亜公司、小倉製紙所、横浜電気、房総煉乳、日本電化工業などの重役を務めました。なお、^{ほうもんかいかん}豊門会館の名は、^{かわさきえいすけ}川崎栄助の発議により、^{ふしほう}富士紡の発展に多大な功績を残した^{わたとよじ}和田豊治の「豊」、^{ふしほう}富士紡の^{さんもん}三門と称された^{もりむらいちざえもん}森村市左衛門、^{ひびやへいざえもん}日比谷平左衛門、^{はまぐちきちえもん}浜口吉右衛門の「門」をとって、名付けられました。



図1-46 ^{かわさきえいすけ}川崎栄助

（参考 ^{おやまちょう}小山町「^{ふしほうせき}富士紡績(株)創設と再建」ほか）

◆^{ゆやまじゆかい}湯山寿介（政治家）

安政5年（1858）～大正12年（1923）。実業家、政治家。^{するがのくにすんとうくんすがぬまむら}駿河国駿東郡菅沼村の豪農、湯山家に生まれました。^{ほりうちきよたか}堀内清孝（^{よねやまようこく}米山蓉谷）に漢籍を学び、^{おだわら}小田原の文学謙塾で学びました。明治13年（1880）、^{すんとうくんすがぬまむら}駿東郡菅沼村学務委員に当選。以後、各種委員、議員を歴任。主として勸業、農事改良、教育関係事業の発展に力を注ぎました。その後も^{すがぬま}菅沼村会議長、^{すんとうくんすがぬまむら}駿東富士両郡連合町村会議員、^{しんじゅ}沼津中学区学務委員などを経て、明治17年（1884）、^{しんじゅ}県会議員に当選。明治22年

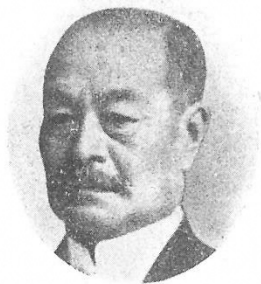


図1-47 ^{ゆやまじゆかい}湯山寿介

（1889）、^{すんとうくん}町村制施行以後、^{すんとうくん}駿東郡27か町村連合会議員、^{しんじゅ}県会議員、^{しんじゅ}衆議院議員などを歴任。大正元年（1912）に本町が発足するのに伴い、^{おやま}初代小山町長に選任されました。^{みくりやぎんこう}御厨銀行（^{しんじゅ}静岡銀行）、^{ふしがすほうせき}富士瓦斯紡績株式会社設立に際し出資援助し、^{すんとう}駿東地方の政財界で大きな力を持ちました。大正12年（1923）、^{おやまちょう}小山町育英奨学資金を寄付し、奨学活動にも尽くしました。それらの功績により従六位勲四等を受章。本町には「^{じゆかいどうろ}寿介道路」の名が残っています。墓所は^{じゅうりんじ}十輪寺にあります。

（参考 静岡新聞社「静岡県歴史人物事典」）

◆和田豊治（実業家）

明治9年（1876）～大正13年（1924）。実業家。明治29年（1896）駿東郡菅沼村に創業した富士瓦斯紡績創業期の専務取締役、社長。大分県中津町（中津市）に生まれました。明治17年（1884）、慶応義塾大学を卒業。その後3年間アメリカで生活。帰国後、日本郵船会社、三井銀行、鐘ヶ淵紡績支配人等を務めた後、明治34年（1901）、富士瓦斯紡績に招かれ専務取締役に就任。創業後不況に苦しむ同社の経営立て直しに尽力し、再生に成功しました。大正5年（1916）社長に就任。また、本町の振興にも意を注ぎ、大正元年（1912）の小山町制施行の際には、富士紡の株式100株を町の基本財産として寄付しました。厚生施設、財団法人豊門会館や豊門グラウンドを建設。大正11年（1922）貴族院議員に勅選されました。従五位勲三等瑞宝章を受章。大正13年（1924）、豊門公園内に町民の手により遺徳碑が建立されました。



図1-48 和田豊治

（参考 静岡新聞社「静岡県歴史人物事典」）

◆渋沢栄一（実業家）

天保11年（1840）～昭和6年（1931）。初め篤太夫と称し、号青淵。武蔵国榛沢郡血洗島（埼玉県大里郡豊里村）に生まれました。生家は養蚕、藍作のほか藍玉作りも手掛けた豪農。少、青年時代は家業に従事して商才を発揮、幕末の動乱期に志士と交わり尊王攘夷運動にはしりました。後に一橋家に仕え、徳川慶喜の弟昭武がパリの万国博覧会列席に際し随行してフランスに渡航、先進国の近代的産業設備や経済制度を見聞しました。維新の変革で急ぎ帰国したのは、明治元年（1868）11月。徳川慶喜は水戸（茨城県水戸市）から駿府（静岡市）に移り、宝台院に謹慎していました。渋沢が洋行中の報告に訪れると、慶喜は彼の人物と外国の新知識とを徳川家のために用いようと仕官を勧めました。渋沢は民間の実業人になろうと欲していましたが、勧めに従い徳川藩の勘定組頭となり、翌年の正月は呉服町の川村屋の二階で迎えました。川村屋の跡は現在、静和産業となっています。彼はここで商法会所の目論見書を作成しました。商法会所は明治2年（1869）1月設立、合本組織（合資会社）で外国の会社制度に倣ったものです。渋沢が監督指導しましたが、8月には廃止されました。事業は常平倉という名で引き続き行われ、家族も東京から呼び寄せました。同年11月新政府が彼の新知識を必要として上京を懇望、民部省租税正に任じ旧制度の改革に当たらせようとし、彼はこれに応じて東京に戻りました。明治4年（1871）大蔵権大丞（次官）に上り、商工業、経済金融などの制度の整備に努めました。明治6年（1873）官を辞し、以後は民間人として第一銀行、王子製紙、大阪紡績、東京ガスほか五百余の会社に関係し、財界の大御所として実業界、国際親善、

福祉事業等に活躍、偉大な業績を残しました。

豊門公園内には、渋沢栄一の「豊額」による和田豊治の遺徳碑があり、また、豊門会館の玄関正面に「豊門会館」としたためられた渋沢栄一の書が掲げられています。



図1-49 渋沢栄一の書（豊門会館入口）

（参考 静岡新聞社「静岡県歴史人物事典」）

◆フレデリック・スタール(人類学者)

安政5年(1858)～昭和8年(1933)。ニューヨーク州オーバーン市に生まれ、明治15年(1882)にロチェスター大学で学位を得、明治18年(1885)にラファイエット大学で博士号(地質学)を取得しました。その後アメリカ自然史博物館(AMNH)で地質学の学芸員として働くようになると、人類学と民族学に興味を持つようになりまし。明治20年(1889)～明治22年(1891)までAMNHの民族学担当の学芸員として働きました。また、明治21年(1888)から翌年にかけては、国立の歴史的遺物の保存団体であるシャトーカ協会の記録係としてもニューヨーク北西部の人類学調査に携わりまし。

明治37年(1904)2月9日、日露戦争開戦の前日にアイヌ研究のため初来日し、以降およそ30年の間に16回日本を訪れまし。昭和8年(1933)8月に東京にて他界。来日中は5度に渡り須走口より富士山山頂へ登山し、大正11年(1922)にはシカゴ大学にて富士山に関する展覧会を開催まし。

日本では羽織袴で通し、日本全国を行脚しつつ様々な分野の日本の民俗について研究を行いました。納札にも強い関心を持ち、その蒐集・研究を行ったことから「お札博士」とも呼ばれまし。スタールと小山町の関係は深く、死後には須走地区に慰霊碑が建てられ、本人の遺言により遺骨も埋葬されています。碑面の文字は徳富蘇峰の筆によるもので、博士の人望と交流の厚さを物語っています。

(参考 「静岡県富士山世界遺産センターHP (<https://mtfuji-whc.jp/>)」)

◆北原白秋(詩人・童謡作家)

明治18年(1885)～昭和17年(1942)。福岡県柳川に生まれまし。本名隆吉。詩、短歌、民謡、童謡等に優れた業績を残まし。静岡県とのかかわりは、短歌、民謡の両面が主であり、大正11年(1922)2月から昭和12年(1937)10月まで、鷺津(湖西市)、静岡、三保(清水市)、沼津、須走、伊豆の各地に及んでいます。須走では、昭和9年(1934)6月、中西悟堂から野鳥を聴く会に誘われて来訪し、「きよろろ鶯」という優れた随筆がなされまし。昭和12年(1937)5月『多磨』主宰の野鳥見学の会で再訪し、短歌「夏鳥」(14首)、随筆「野鳥見学記」を得

ました。

(参考 静岡新聞社「静岡県歴史人物事典」)

◆徳富蘇峰（ジャーナリスト・詩論家）

文久3年（1863）～昭和32年（1957）。肥後（熊本県）水俣の郷土、徳富一敬の長男として生まれました。本名は猪一郎、字は正敬。熊本洋学校にて学び、後に京都の同志社に移りましたが、明治13年（1880）に退学。翌年帰郷して大江義塾を開き、漢学や英学、歴史、経済、政治学などを教授しました。その後『第一九世紀日本ノ青年及其教育』、『将来之日本』を出版し文名を馳せました。明治20年（1887）に上京して民友社を設立し、雑誌『国民之友』や『国民新聞』などを刊行し、平和主義のジャーナリストとして活動しました。日露戦争後は内務省勅任参事官となり、明治44年（1911）に貴族院議員となります。大正2年（1913）に政界を離れ、御厨の青竜寺（現御殿場市）を訪れましたが病に倒れ、この地で静養し、以後40年余りにわたってしばしば滞在しました。昭和11年（1936）7月には御厨において「御厨蘇峰会」が創立されました。大正12年（1923）に『近世日本国民史』に対して日本学士院賞を授与されました。第二次世界大戦中は大日本文学報国会、大日本言論報国会の会長となり、昭和18年（1943）に文化勲章を受章。敗戦後は公職追放の指名を受け、熱海の伊豆山へ移りました。昭和32年（1957）この地で死去しました。

小山町においては昭和11年（1936）に豊門会館において御厨蘇峰会の発会式を行っています。また館内には徳富蘇峰による「和為貴」の額が掲げられています。



図1-50 徳富蘇峰の書

(参考 小山町「豊門公園 ガイドのしおり」、静岡新聞社「静岡県歴史人物事典」)

◆朝倉文夫（彫刻家）

明治26年（1883）～昭和39年（1964）。明治16年（1883）渡辺要蔵の三男として生まれました。明治26年（1893）に朝倉種彦の養子となり、4月に直入郡高等小学校に入学。明治36年（1903）、20歳の時、東京美術学校彫刻選科に入学。明治40年（1907）に卒業作品として「進化」を作成、研究科に入学。その後明治41年（1908）の「閻」「老猿」、明治43年（1910）の「墓守」など、数々の受賞作品を完成させました。日本近代彫塑技法を確立し、明治・大正・昭和にわたり、日本美術界の重鎮として位置づけられました。大正13年（1924）に帝国美術院会員となりますが昭和3年（1928）にこれを辞



図1-51 豊門公園内の和田君遺徳碑

任。昭和9年（1934）にアトリエを改築し「朝倉彫塑塾」を開きました。小山町おやまちょうにおいては、独特の意匠が特徴的である「和田君遺惠碑」（国登録有形文化財）のデザインを手掛けました。

（参考 小山町「富士紡と文化遺産」ほか）

◆朝倉每人（政治家・実業家）

明治15年（1882）～昭和46年（1971）。大分県で生まれました。明治40年（1907）京都帝国大学法科を卒業後、同年富士瓦斯紡績ふしがすぼうせきに入社しました。大正14年（1925）には同社常務取締役だいにふしでんりょくに就任し、昭和5年（1930）からは第二富士電力株式会社代表取締役ふしでんりょく、富士電力株式会社代表取締役、衆議院議員（立憲民政党）を歴任しました。昭和12年（1937）からは日産自動車株式会社常務取締役にっさんじどうしゃ、日産自動車販売株式会社代表取締役はんばいかふしきがいしや、日本自動車配給株式会社社長にほんじどうしゃはいきゅう、自動車統制会理事にほんじどうしゃはいきゅう、日本自動車配給株式会社社長を務めました。戦後、連合軍最高司令官総司令部（GHQ）の指令により、昭和21年（1946）に公職を追放されましたが、昭和25年（1950）に追放が解除され、明和紡績株式会社社長めいわぼうせき、経済問題調査会理事長、育英奨学・社会福祉関係団体役員等を歴任しました。小山町おやまちょうにおいては、富士紡績小山工場第6代工場長を務めた経験があり、和田坂を命名しました。

（参考 小山町「富士紡と文化遺産」ほか）

◆中西悟堂（野鳥研究家）

明治28年（1895）～昭和59年（1984）。石川県金沢市長町に生まれました。父・富男は日清戦争の負傷がもとで亡くなり、母は長崎の実家へ戻ったため、東京にいた父の長兄、中西元治郎なかにしもとじろうの養子となりました。明治44年（1911）に神代村（現・調布市）の天台宗深大寺じんだいじで得度、法名とくど ほうみょうをもらい、戸籍上も「悟堂ごどう」と改名しました。短歌や詩に親しみながら、昭和元年（1926）からは虫類や鳥類の観察をはじめ、昭和9年（1934）3月に「日本野鳥の会」を創設、5月に季刊誌『野鳥』を創刊しました。同年6月には富士山麓ふしさんろく、小山町須走おやまちょうすばしりにて日本で最初の探鳥会たんちようかい（鳥巢見学会）を開催し、翌10年（1935）には『野鳥と共に』を刊行、これにより野鳥という言葉が世間に定着しました。その後は、昭和43年（1968）に『定本野鳥記』ていほんやちようきを著し、昭和45年（1970）に詩人クラブの会長に就任したほか、昭和46年（1971）に勲三等旭日中綬章くんとさんとうきよくじつなかじゆしょうを受賞、昭和52年（1977）には文化功労者ぶんかこうろうしやとして顕彰されました。

（参考 公益社団法人日本野鳥の会HP（<https://www.wbsj.org/>）ほか）

8 おやまちょう 小山町の歴代町長一覧

歴代	氏名	就任期間
1	ゆやまじゆかい 湯山寿介	大正元年（1912）10月16日 ～ 大正5年（1916）10月15日
2	ゆやまごうへい 湯山剛平	大正5年（1916）10月16日 ～ 大正9年（1920）10月15日
3	むろふしかん 室伏完	大正9年（1920）10月18日 ～ 大正13年（1924）10月17日
4	むろふしかん 室伏完	大正13年（1924）10月18日 ～ 大正14年（1925）3月17日
5	ゆやまごうへい 湯山剛平	大正14年（1925）10月12日 ～ 昭和4年（1929）10月11日
6	ゆやましうへい 湯山正平	昭和4年（1929）11月8日 ～ 昭和8年（1933）11月7日
7	たかはしぶんじろう 高橋文治郎	昭和8年（1933）11月8日 ～ 昭和12年（1937）11月7日
8	いわたゆきえ 岩田幸恵	昭和12年（1937）11月8日 ～ 昭和13年（1938）9月11日
9	たかはしぶんじろう 高橋文治郎	昭和13年（1938）9月20日 ～ 昭和16年（1941）1月16日
10	むろふしたけし 室伏武	昭和16年（1941）2月3日 ～ 昭和20年（1945）2月2日
11	むろふしたけし 室伏武	昭和20年（1945）2月3日 ～ 昭和21年（1947）11月24日
12	ゆやましうへい 湯山正平	昭和22年（1947）4月5日 ～ 昭和26年（1951）4月4日
13	ゆやましうへい 湯山正平	昭和26年（1951）4月23日 ～ 昭和30年（1955）4月22日
14	ゆやましうへい 湯山正平	昭和30年（1955）5月1日 ～ 昭和34年（1959）4月30日
15	すずきしげる 鈴木繁	昭和34年（1959）5月1日 ～ 昭和38年（1963）4月30日
16	しんじょうしょうぞう 神成昇造	昭和38年（1963）5月1日 ～ 昭和42年（1967）4月30日
17	しんじょうしょうぞう 神成昇造	昭和42年（1967）5月1日 ～ 昭和46年（1971）4月30日
18	ゆやまかつんど 湯山勝人	昭和46年（1971）5月1日 ～ 昭和50年（1975）4月30日
19	ゆやまかつんど 湯山勝人	昭和50年（1975）5月1日 ～ 昭和54年（1979）4月30日
20	ゆやまかつんど 湯山勝人	昭和54年（1979）5月1日 ～ 昭和58年（1983）4月30日
21	たかはしはるお 高橋春雄	昭和58年（1983）5月1日 ～ 昭和62年（1987）4月30日
22	たしろかずお 田代和男	昭和62年（1987）5月1日 ～ 平成3年（1991）4月30日
23	たしろかずお 田代和男	平成3年（1991）5月1日 ～ 平成7年（1995）4月30日
24	おさだひさし 長田央	平成7年（1995）5月1日 ～ 平成11年（1999）4月30日
25	おさだひさし 長田央	平成11年（1999）5月1日 ～ 平成15年（2003）4月30日
26	おさだひさし 長田央	平成15年（2003）5月1日 ～ 平成19年（2007）4月30日
27	たかはしひろし 高橋宏	平成19年（2007）5月1日 ～ 平成23年（2011）4月30日
28	こみやまさひで 込山正秀	平成23年（2011）5月1日 ～ 平成27年（2015）4月30日
29	こみやまさひで 込山正秀	平成27年（2015）5月1日 ～ 平成31年（2019）4月30日
30	いけせいいち 池谷晴一	令和元年（2019）5月1日 ～ 令和5年（2023）4月30日
31	こみやまさひで 込山正秀	令和5年（2023）5月1日 ～ 令和9年（2027）4月30日